

Ⅲ 奈良盆地における後期の埴輪生産と系統

1 奈良盆地における後期埴輪の諸系統

前述したようにV期の開始は、各所での拠点的生产地の確立に対応しており、それぞれでの継続的な生産が各種の系統差を生み出す契機となっていく。V期開始期には未だ系統上の相違は一部を除いて不明瞭であり、その差が顕著になるのはV期新相(MT15型式期以降)においてである。以下ではそうしたV期新相以降の状況を念頭に置きながら、奈良盆地の後期円筒埴輪をA～D類に4大別し、A類についてはさらに生産地や細部の特徴の相違にもとづいて4類に細別する案を提示する。

(1) A類

ここでいうA類は、V群円筒埴輪として包括される後期の「畿内」に通有の円筒埴輪をさす。奈良盆地ではこれまでも、V群円筒埴輪を「大和A類」として一括した上で、MT15型式期以降に出現する断続ナデ技法Bの採用・非採用を主な指標として、V群円筒埴輪(鐘方分類の大和A類)の系統上の細別が模索されてきた経緯がある(鐘方1992、2003、鐘方ほか1995)。以下では、その後の新資料および新知見を踏まえ、V群円筒埴輪をAa～Ad類に細分する。

Aa類 V期新相(MT15型式期)以降にⅡ群無調整突帯、いわゆる断続ナデ技法Bを採用する一群。前述のとおり、断続ナデ技法Bは一条目突帯に限って最終調整のヨコナデを省くために、整形時のナデ付

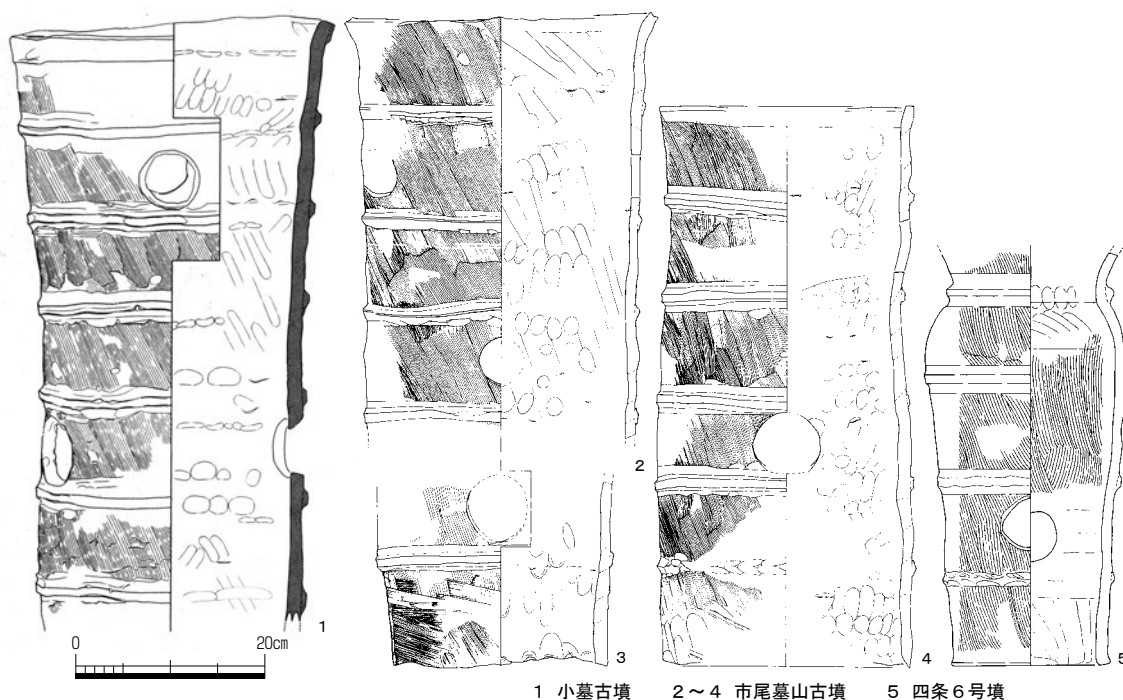


Fig. 10 Aa類の埴輪 1:8

け痕跡がそのまま露呈する無調整突帯の一種であり、一古墳においても全個体で採用されるものでもないため、絶対的な指標とはなり得ないが、三宅町石見遺跡例をはじめ盆地南部の例ではかなりの比率で採用されており、破片資料でも一定量の出土をみればその存在が認識できる場合が多い。前章で詳述したように、Ⅱ群無調整突帯はナデ付けのみの典型的な断続ナデ技法Bに先立ち、Ⅴ期中相（TK47～MT15型式期）に板オサエ整形を工程上を含んだ状態でヨコナデの省略が開始される。いわば古式の断続ナデ技法Bと評価できるものであり、この種の突帯が確認できれば、Ⅴ期中相段階においてもAa類として認定することが可能である。

外面調整は、一次調整のナナメハケ、内面調整はナデ・ハケ調整である。内面のハケ調整は省略傾向にあり、施される場合でも最上段（口縁部）内面に限定的に施される場合が多い。2条目以上の突帯製作は断続ナデ技法Aで、しばしばヨコナデの上下にナデ付けの痕跡がはみ出す。ナデ付けの凹凸に起因して突帯は波形を呈し、突出度も低く扁平である。底部調整は外面板オサエが基本で、底面が原形を留めないほど強く押圧されるものが多いが、内外面端部のケズリ技法も少量存在する。また、北花内大塚古墳や鳥屋ミサンザイ古墳など盆地南部の大型品では、製作工程上の比較的早い段階に内面端部に集中的にユビオサエを加えて内面側への粘土の迫り出しを修正する手法が散見される。

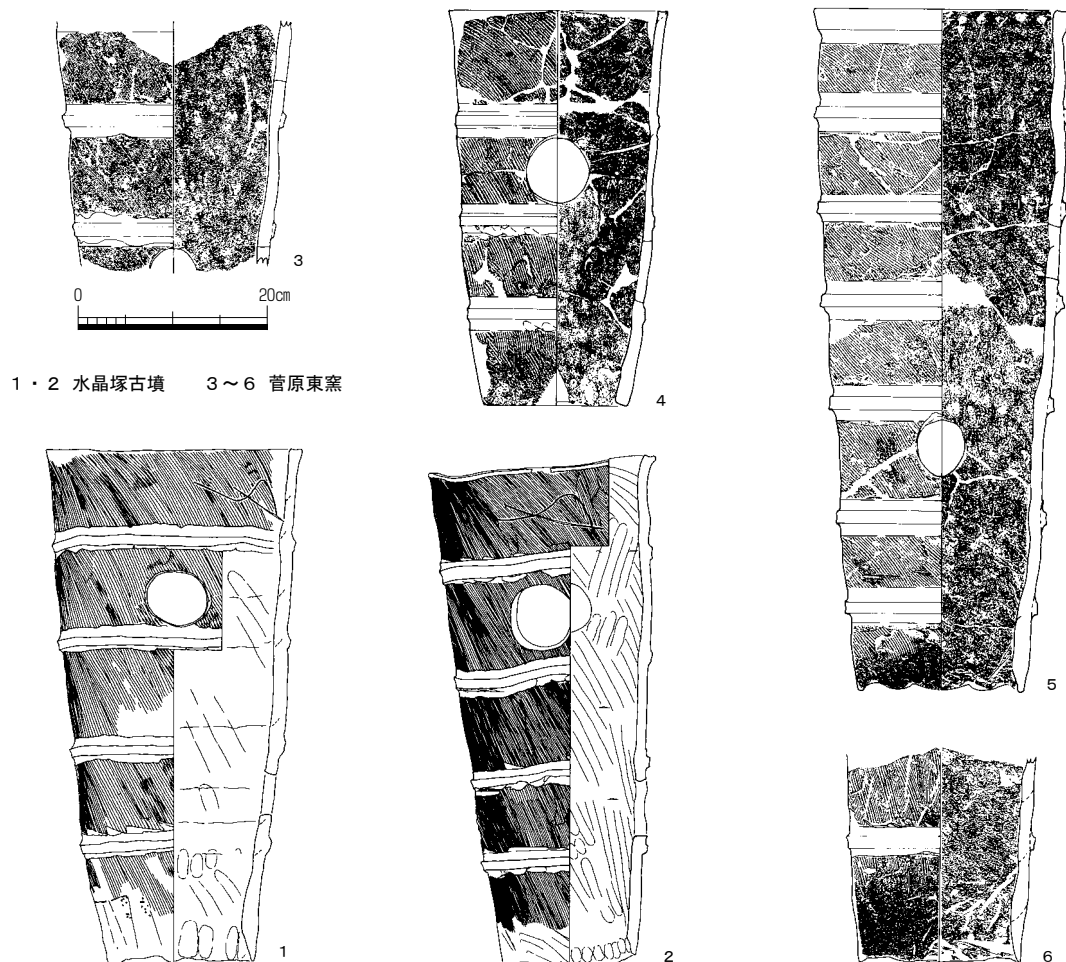
形態上の特徴は、外面のナナメハケ調整に起因して上方にやや開くプロポーシオンが基本で、円形透孔を1段2孔配置し、段間では向きを直交させる。3条4段構成の場合は2・3段目に連続して配置するが、4条5段構成以上の場合は連続する段には透孔を穿たず、一段置きに配置する（以下、一段置きの透孔配置を隔段穿孔と呼ぶ）。口縁部形態は、直立ないしは器形に沿って外方に開くものが一般的である。端部は強いヨコナデによりU字形に湾曲し、外側の稜が小さく摘み出されるものが多い。また、大型品を中心に採用される貼付口縁は、粘土帯上に貼付け時のユビオサエの凹凸を残さず平坦に仕上げ、ヨコハケ調整を加えるものもある。

Ab類 基本的な特徴はAa類と大差がないが、Aa類が断続ナデ技法Bを採用するⅤ期新相（MT15型式期以降）になっても同技法を用いることがない一群。奈良市菅原東窯産の埴輪が標識となるが、同窯の製品の厳密な同定作業はまだ十分進んでおらず、同窯の製品と同様の特徴をもつ未知の窯が他に存在する可能性も残る。

外面調整は、一次調整のナナメハケ、内面調整はナデ・ハケ調整である。内面のハケ調整は省略傾向にあるが、Aa類よりもその傾向はより顕著で、最上段内面もナデで調整を終えるものが多い。突帯製作は断続ナデ技法Aで、しばしばヨコナデの上下にナデ付けの痕跡がはみ出す。ナデ付けの凹凸に起因して突帯は波形を呈し、突出度も低く扁平である。底部調整は外面板オサエで、底面が原形を留めないほど強く押圧されるものが多い。

プロポーシオンは、外面のナナメハケ調整に起因して上方にやや開く形状が多い。透孔は円形透孔を1段2孔配置し、段間では向きを直交させる。3条4段構成の場合は2・3段目に連続して配置するが、4条5段構成以上の場合は隔段穿孔となる。口縁部形態は、直立ないしは器形に沿って外方に開くものが多い。端部は強いヨコナデによりU字形に湾曲し、外側の稜が小さく摘み出されるものが多い。大型品を中心に採用される貼付口縁は、粘土帯上に貼付け時のユビオサエの凹凸を残さず平坦に仕上げる。

Ac類 Aa、Ab類との最大の相違は、透孔の配置にある。すなわち、円形透孔を1段2孔、段間では



1・2 水晶塚古墳 3～6 菅原東窯

Fig. 11 Ab類の埴輪 1:8

向きを直交させて配置する点は同じであるが、4条5段構成以上の場合、胴部の各段に透孔を配置する（以下、連段穿孔と呼ぶ）点で、他のA類と決定的に異なる。プロポーションも上方への開きが相対的に緩やかで、直立状のことが多い。また、いわゆる貼付口縁は、Aa・Ab類ではナデで平坦に仕上げるのに対し、Ac類に共伴するものはいずれも粘土帯上に貼付け時のユビオサエの凹凸を明瞭に残す。高橋克壽が貼付押圧口縁と呼んだものがこれに相当する（高橋1995）。

外面調整は一次調整のナナメハケであるが、そのほかのA類に比べて工具の傾きが弱く、タテハケに近いものが多い。内面調整はナデ・ハケ調整で、ナデ調整の場合でも口縁部付近に関してはハケ調整を省略せずに施すものが多い。突帯製作は断続ナデ技法Aであるが、扁平なものが少なく総じて突出度が高い。底部調整は外面板オサエや、稀にケズリ調整が散見されるが、底部調整自体の施効率はさほど高くなく、板オサエが施される場合でも器形の変形はさほど顕著でない。

またAc類に伴う石見型、盾形、大刀形等の形象埴輪の底部は、円筒埴輪の貼付押圧口縁と同様、外面下端にユビオサエ痕跡を明瞭に残すかたちで粘土帯を貼り付ける。鐘方正樹は石見型埴輪の底部外面の突帯を a：底面よりも上に突帯がめぐるもの、b：底面と同じ位置で突帯がめぐるもの、の2者に分類し（鐘方1992）、東影悠も鐘方の分類を踏襲しつつ、底部突帯の製作技法から鐘方分類 a = ナデ調整突帯、鐘方分類 b = 押付突帯と呼び分ける（東影2010）。従来、認識されてきたこの底部突帯の相違のうち、

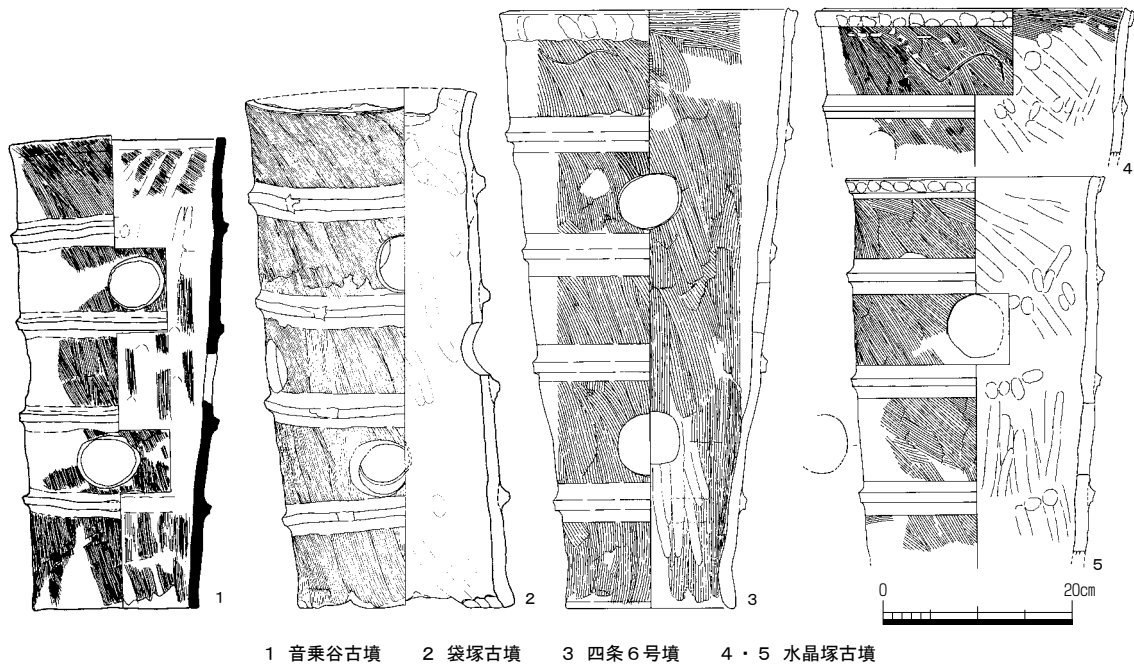


Fig. 12 Ac類の埴輪 1:8

後者についてはAc類に特有のものとして再評価できる。本来、倒立技法を用いる形象埴輪の基底部は、円筒埴輪として製作されたものを反転して用いたものであり、Ac類の貼付口縁とそれに共伴する形象埴輪の底部突帯が対応するのは至極当然のことである。天理岩室池古墳や長岡京市塚本古墳 (Fig. 13-8) にみる鐘方分類b = 押付突帯の石見型埴輪では、円筒部分が連段穿孔となっていることも両者の対応関係を傍証するものといえよう。

これに関して高橋克壽は、早くに岩室池古墳や塚本古墳に加えて、米原市山津照神社古墳やたつの市西宮山古墳などの石見型埴輪の基底部が自身のいう貼付押圧口縁と製作技法を同じくする点に着目していた。しかしながら、石見型埴輪の基底部に「押圧突帯があっても、円筒埴輪にはそれが全く認められない場合がむしろ普通である」として、両者の対応関係を積極的に評価するには至らなかった (高橋1995)。しかしながら本書では、連段穿孔で直交式となる透孔配置がこれら一連の資料を貫く共通の属性となることを突き止めることができた。これにより、底部下端の突帯にユビオサエ痕跡を残す一群の形象埴輪も含めて、全体をAc類として一括して把握することが可能になったといえる (Fig. 13)。

なお、Ac類に伴う石見型埴輪では、形象部上辺を粘土帯で加飾する例が多いが、同部分にも貼付け時のユビオサエ痕跡が明瞭に残る (Fig. 13-1・5、Fig. 29-9・10・12)。この点も、貼付押圧口縁との対応関係を示す属性として捉えることができよう。この観点からすれば、大和郡山市水晶塚古墳 (Fig. 13-3・4) や田原本町黒田大塚古墳、天理市小墓古墳出土の軸受端部および笠端部の粘土帯にユビオサエ痕を明瞭に残す蓋形埴輪も、Ac類と系統を同じくする可能性が浮上する。

なお、Ac類の標識的な存在である木津川市音乗谷古墳では、円筒埴輪のみならず形象埴輪も含めて胎土素地が全般的に際立った白色を呈する。音乗谷古墳の馬形埴輪は、頭部側面の粘土板の垂下が頬よりも顎部分でさらに下方へ拡張するが、これと同じ特徴をもつ奈良市ヤイ古墳の馬形埴輪も胎土は白色である。Ac類およびそれに伴う形象埴輪のうち、そうした白色基調の胎土のものは、菅原東窯とは異

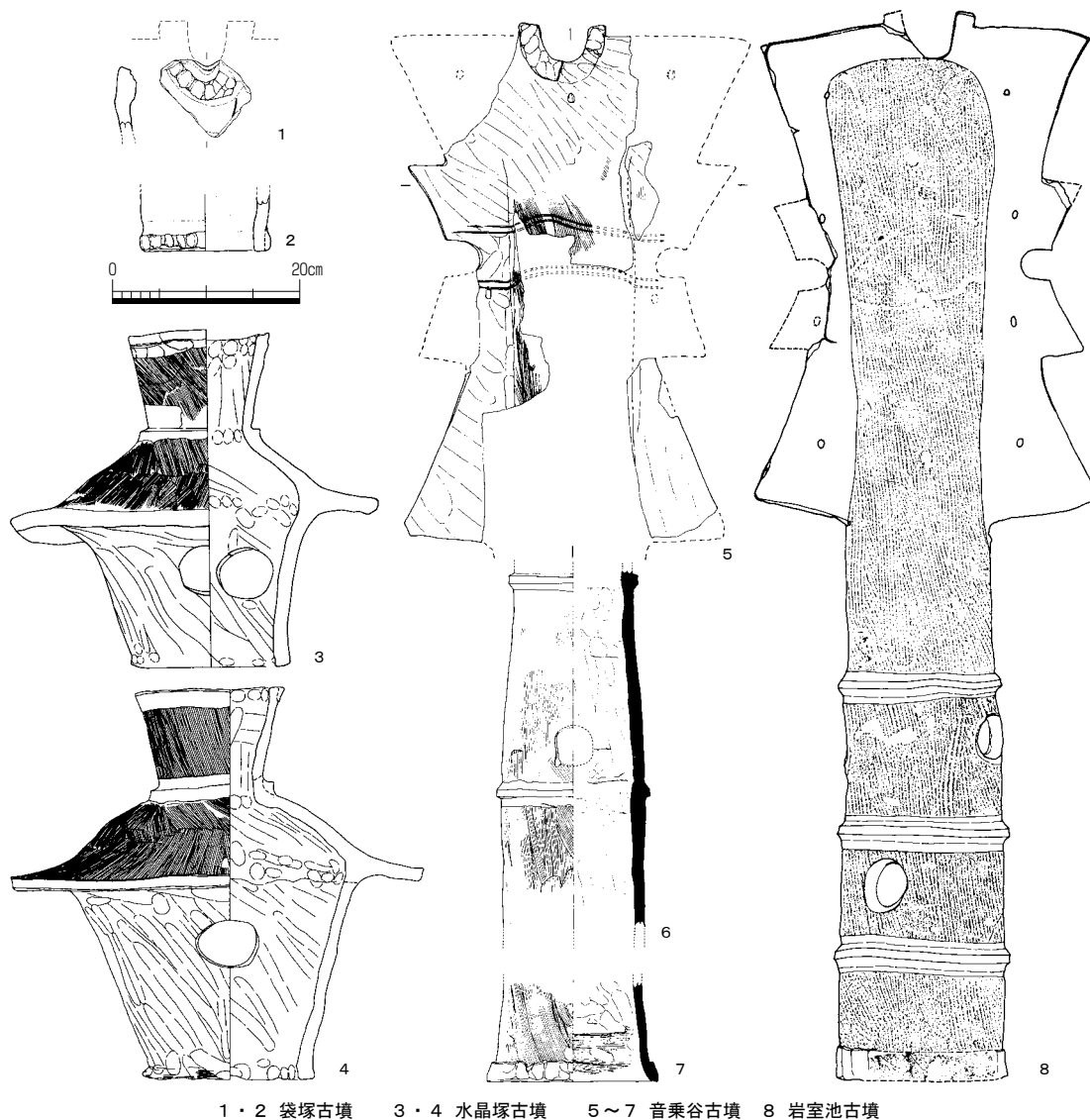


Fig. 13 Ac類にともなう形象埴輪 1:8

なる平城山周辺の未知の窯で生産された可能性が考えられる。さらに付言するならば、Ac類に伴う家形埴輪は壁体やそれに続く下屋根の平面形が隅丸方形ないしは楕円形となる傾向が認められ、とりわけ入母屋造においてその特徴が顕著である点を指摘できる。

Ad類 基本的な特徴はAa、Ab類と共通するが、底部調整は外面板オサエを用いず、内面ケズリに特化した一群。プロポーションは、上方への開きが大きく、顕著な逆台形状を呈するものが多い。また、口縁部形態は、端部付近の湾曲が認められず直立状を呈するものが多い。突帯製作は断続ナデ技法Aで、しばしばヨコナデの上下にナデ付痕跡がはみ出す。

川西町佐々木塚古墳や大和郡山市開古墳がこの系統の代表的な事例であるが、桜井市勝山東古墳や大和郡山市水晶塚古墳の一部にも底部調整に内面ケズリを施すものがあり、Ad類に属す可能性がある。また、田原本町小阪里中古墳例は、同様に底部内面をケズリ調整するが、外面調整にB種ヨコハケを多用しており、この系統の初源例として位置づけ得る。これらは盆地中央部に分布域があり、とりわけ

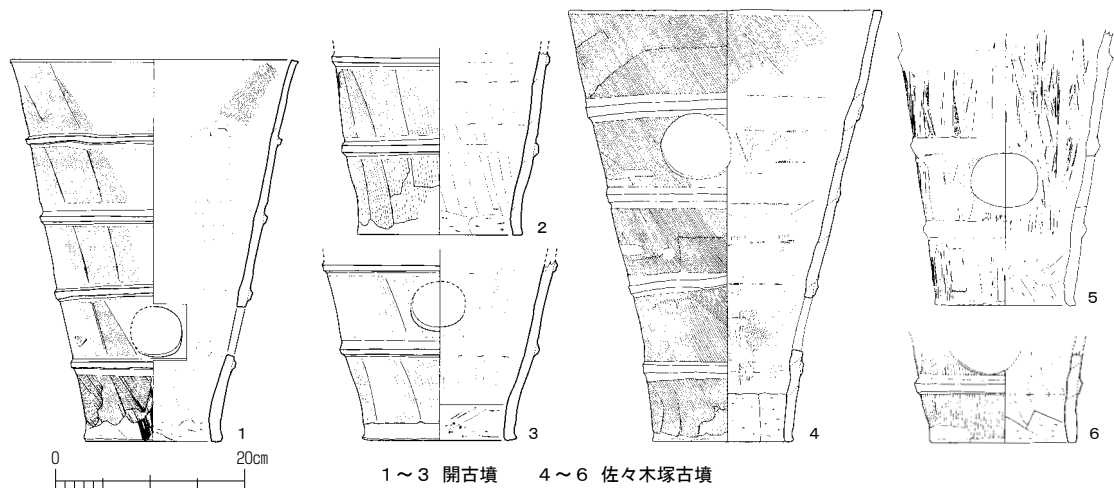


Fig. 14 Ad類の埴輪 1:8

佐々木塚古墳や開古墳の胎土は大粒の白色風化礫を大量に含む点で共通する。盆地中央部の消費を満たすための未知の生産地が存在する蓋然性が高い。

(2) B類 (大和南部型)

底部高が他の段に比べて著しく高く、外面調整に回転性のヨコハケを用いる特徴的な一群の円筒埴輪をさす。学史的にはまず、河内一浩が和歌山県域で通有のV群円筒埴輪との対比からその存在を見出し、これに「紀伊型」なる名称を与えた(河内1988)。須恵器編年のMT15・TK10型式期に併行する資料でありながら、外面二次調整のヨコハケが施される点に最大の特徴が見出され、あわせて内面にもハケ調整がなされる点、口縁端部をヨコナデで肥厚させる点などが指標として抽出された。

その後、鐘方正樹は「紀伊型」と同じ特徴をもつ埴輪が奈良盆地南部にも集中的に分布することを明らかにし、これを「大和B類」と呼んだ。鐘方は、河内が抽出した特徴に加えて、突帯貼付に断続ナデ技法を用いないこと、最下段が他の段よりも高いこと、口縁部の肥厚は内側に顕著である点、底部調整に板による押圧やヨコナデが多用されること、口縁部外面に波形のヘラ描きがあること、などを指摘し、同種の埴輪が滋賀県野洲川流域にもみられることから、「紀伊型」の名称および紀伊独自の埴輪生産について否定的な見解を示した(鐘方1992)。

その後、河内は「紀伊型」の特徴を再整理し、逆台形のプロポーション、扁平なM字の突帯、二次調整のヨコハケはストロークが長い点、口縁部の波状ヘラ記号などをその指標に付加した。さらに「紀伊型」の高い底部高は、器高全体を大きく2分割する位置に一条目突帯を貼付けることに起因するとの理解を提示した(河内2004)。

なお「紀伊型」の名称をめぐるのは、奈良盆地南部を核とする分布傾向を踏まえて、「環畿内南部型」なる名称が一時的に登場したが(河内2003、鐘方2003)、あまりにも概念的すぎる呼称であったこともあり、近年では「紀伊・大和南部型」(辻川2010)や「大和南部型」(内藤2020)が用いられるようになってきている。ここでは他の系統呼称との対比からB類と仮称するが、後述のようにその出現・中心地は奈良盆地南部である蓋然性が高く、個別名称を用いる場合は「大和南部型」とするのが妥当と考える。

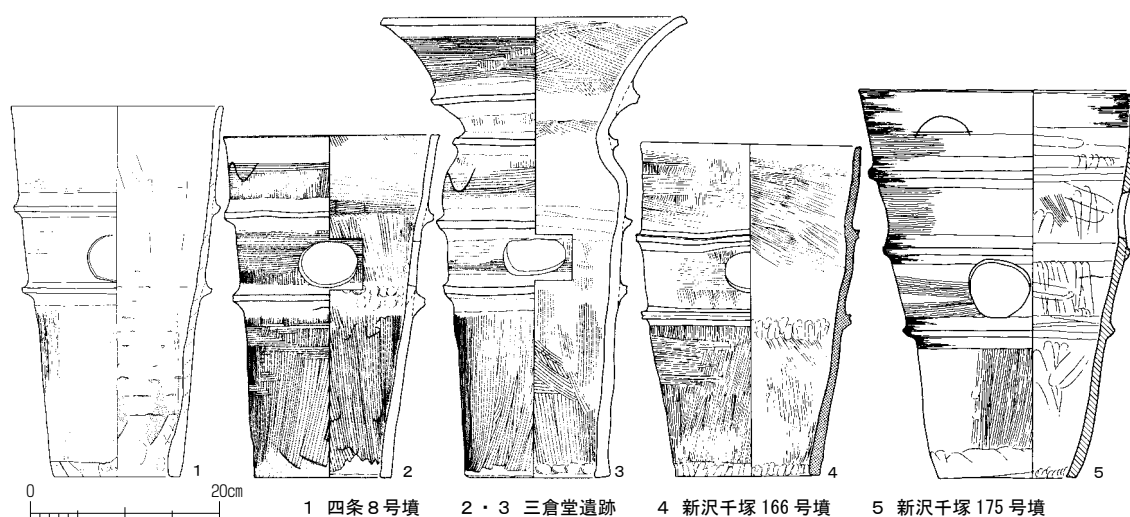


Fig. 15 B類の埴輪 1:8

製作技法 B類は、近年、製作技法も踏まえて研究が深化してきており、とりわけ内藤元太は、「外面一次調整のタテハケと内面調整のタテハケの傾きが相反する」原則が厳密に共有されている点、焼成は軟質で野焼き焼成された可能性のあるものが含まれる点、底部調整は外面下端に回転ケズリを加えるものが古く、板オサエ調整が後出するなど、重要な指摘を行っている（内藤2018、2020）。また、東影悠は主に、回転ヨコハケ、回転ケズリ、口縁部の肥厚に須恵器の製作技術との共通性を見出し、本稿B類（「大和南部型」）を須恵器系埴輪として積極的に評価する（東影2019）。

前述のようにB類は、V群に比べて突帯の突出度が高く、断続ナデによる貼付けを採用しない点に特徴がある。また突帯の割付に沈線を用いており、これにより底部高は突帯間隔のおおよそ2倍に割り付けられる。従来、B類は、IV群の突帯製作技法との親縁性から、IV群系の範疇で理解する方向性が強調されてきたが（鐘方2003）、内藤や東影が指摘するように、その他の特徴は通有のIV群円筒埴輪からの飛躍が大きい。たしかに割付技法には、IV群の凹線技法からの一定の影響が見出されるが、IV群では工具に一定の幅があり「凹線」になること、また二重凹線（沈線）になるものが多いのに対し、B類では「凹線」ではなく一本の細い「沈線」となる例が目立つ点で細部に相違がある（Fig. 16-4）。

また、焼成については、内藤が指摘するように野焼きの可能性が高い。器面の摩滅が著しいものが多く、焼成温度がさほど高くなかったことが推測されることに加え、断片的に黒斑が確認できることがその根拠である。ただし黒斑は、覆い接触黒斑、接地面黒斑が対称の位置に広く付着するⅢ期以前の黒斑とは異なり、口縁・底部の外端付近や突帯上面などに小さく付着する例が多い（Fig. 16-7・8）。これらはその付着状況から設置面黒斑である可能性が高く、そのため残存率の低い個体では黒斑を確認できない場合が多い。明確な覆い接触黒斑が確認できないことに加えて、総じて小型の製品が多いことから、重ね焼きを多用した野焼き焼成であったことが推測される。いずれにしても、窖窯で硬質焼成されるIV群とは焼成技術に根本的な相違があったことは確かであろう。

さらに底部調整については、当初は外面下端に倒立状態で回転ケズリを加えることを原則とするが（Fig. 16-5）、新相では板オサエが主体となる（Fig. 16-6）。内藤は、この差を積極的に時期差として捉え、自身の編年の指標として重視するが、共伴須恵器でみるとB類出現期であるTK23・47型式期の中で両



1 回転ヨコハケ（三倉堂遺跡）



2 突帯下面のナデ付痕跡（三倉堂遺跡）



3 右上がりのタテハケ（四条8号墳）



4 突帯割付の沈線（三倉堂遺跡）



5 外面下端の回転ケズリ（三倉堂遺跡）



6 底部外面の板オサエ調整（四条9号墳）



7 底部外面の黒斑と焼きムラ（四条9号墳）



8 底部外面の黒斑（四条8号墳）

Fig. 16 B類の製作技法

者は併存する関係にある。回転ケズリが単独で存在する時間幅はごくわずかであり、大きく遅れることなく板オサエが出現したのが実態とみられる。後述のように、外面下端の回転ケズリは轆轤状の回転台を使用した製作工程と密接な関係がある。板オサエ調整の採用は、内藤が指摘するようにV群円筒埴輪における底部板オサエ調整の影響がおよんだ結果とみられるが、手順としては板オサエの前に先行して回転ケズリが施されている可能性も視野に置く必要があろう。

回転台と作業姿勢の復元 B類は軟質焼成で表面の遺存状態の良好なものが乏しいこともあり、特徴的な形態属性に比べて、製作技法の検討は十分深められていない。そのなかにあつて、上述のように内藤によって見出された「外面一次調整のタテハケと内面調整のタテハケの傾きが相反する」原則は、B類の技術系譜上の評価において極めて重要なポイントとなる。内藤の表現はやや抽象的であるが、具体的にはB類の外面一次調整のタテハケは、とりわけ最下段付近においてやや主軸が右に傾く（Fig. 16-3）点に特徴がある（高橋2007・2012）。埴輪の製作者は大部分が右利きであるという経験則からも、B類のタテハケがほぼ例外なく主軸を右に傾ける事実は、製作者の利き手ではなく、回転台の使用方に要因があると推測される。

一般的なV群の円筒埴輪では、左上がりにタテ・ナナメハケが施されるが、これは圧倒的多数を占める右利き工人が埴輪のやや右に位置し、右手で工具を下から上に引き上げて調整をおこなった結果である。予め述べておくと、筆者は須恵器系でない通有の埴輪であっても、その製作には簡易な回転台の利用が不可欠だったと考えている。「畿内」通有の円筒埴輪の外面調整は、一次・二次を問わず調整単位は埴輪に正対する位置の観察（実測図の向き）で向かって左方向に重複していく。したがって回転台は左回転（反時計回り）となる。内面調整もおなじく主軸が左に傾き、単位も左方向に重複していくが、外周と内周で円弧の向きが反転するため、回転台の進行は右回転（時計回り）となる。つまり、「畿内」の通有の埴輪製作では、それぞれの作業姿勢に応じて合理的に埴輪を左右双方に回転させていた状況が復元できる。この点は、左利き工人の製品では、調整単位の重複および工具の進行方向が右利き工人とは完全に反転することからも裏付けられる。

これに対して、主軸が右に傾くB類の外面調整の場合、タテハケの重複は向かって右方向であり、回転台は通有の外面調整とは異なり右回転となる。B類のタテハケがほぼ例外なく主軸を右に傾ける事実は、製作者が埴輪の背後に立って上から見下ろすような姿勢で埴輪を右回転させながらタテハケを施した結果と理解できる。タテハケの主軸の傾きは、低位ほど大きく、上方にむかうにつれて垂直に変化するが、この点は上記のような作業姿勢のもと右利きの工人が右肘を起点に円弧を描くように工具を引き上げることに起因するのであろう。これに対して、B類の内面調整は、外面調整と相反して左上がりである。単位の重複順序からも回転台は右回転であることが確認できる。すなわち、B類では、外面・内面ともに右回転で調整されたことが判明する。

一方、ヨコハケ調整時の回転は、器面の状態が良好なものが少なく判然としないが、外面下端の回転ケズリでは、原則、正位置で向かって左方向に砂粒が動く（Fig. 16-5）。見かけ上は埴輪が左回転しているかのように見えるが、外面下端の回転ケズリは倒立状態で施されるため、やはり右回転での施工となる。

さらに、大和高田市三倉堂遺跡出土例のように器面の遺存状態の良好な資料では、突帯の下面にヨコ

ナデ以前の断続的なナデ付け痕跡が明瞭に残るが、このナデ付け痕跡も砂粒の動きから指は向かって右上がりに動いており、単位も右方向に重複していくのが確認できる個体がある (Fig. 16-2)。右回転する埴輪に対して右利き工人がおそらく親指を左から右へと動かして突帯をナデ付けていった状況が復元できる。

このように、通有の埴輪製作が作業内容に応じて回転台を左右双方に回していたのとは異なり、B類では回転台は一貫して右回転であり、回転台の構造やその使用方法が通有の埴輪製作とは異なっていたものと考えられる。従来、B類のヨコハケは、「尾張型」などの典型的な須恵器系埴輪に比べて回転力に劣る感が強く、焼成の不良さも相まって、「静止痕をとどめないヨコハケ」や「ストロークの長いヨコハケ」といった、典型的なC種ヨコハケとは異なる評価が与えられてきた。しかしながら、底部外面下端の回転ケズリが激しく砂粒を引きずって施工されている状況からも、通有の円筒埴輪より強い回転力が用いられたことは間違いない。一定の回転力を備え、かつ回転方向が一方向に規制される状況からは、蹴轆轤状の構造をもつ回転台の使用が想定される。通有の埴輪製作では、利き手でないもう一方の手で回転台ないしは埴輪を回転させるのに対し、B類では上述の作業姿勢上、両手は常に埴輪に接触し得る状態であったとみられることから、あるいは、足で回転台を右回転させながら製作していた可能性も考えられよう。以上のような回転台の使用方法是、広義の須恵器系埴輪にも通底する特徴といえるかもしれない。

輪台技法の可能性 轆轤状の回転台で製作される円筒埴輪の諸例については、しばしば回転台から離脱させるための技法痕跡が見出される。辻川哲朗は、乾燥期間をはさむことが不可避の円筒埴輪の製作において、須恵器工人が回転台を利用しつつ関与する場合、複数個体の製作を同時に進行させるためには、製作中の個体を回転台からいったん離脱させて乾燥場所に移し、空いた回転台で別個体を製作する方法がとられたものと推測する。その際、「乾燥工程のたびに回転台から製作途上の個体を器体に歪みを生じさせることなく安全に離脱させる」ために回転台離脱技法が必要とされたとし、その具体的な方法として輪台技法 (いわゆる淡輪技法) やヘラ切り技法が用いられたとする (辻川2007)。

B類の場合、明確な輪台技法やヘラ切り技法に相当する痕跡は見出せないが、底面は不自然なまでに平滑な状態を呈するものが多い。東影悠は、底面が平滑な状態を呈する要因について、「回転力を有する台上での遠心力に耐える必要性から」通有の円筒埴輪のような棒状あるいは蔓状のものを下に敷くことなく、「平滑な台上に粘土を強く密着させて置いたため」と理解する (東影2019)。加えて、B類で多用される外面下端の回転ケズリは「回転台に密着させるために厚くなった粘土を回転台からの離脱時に削り取った痕跡」と理解する。

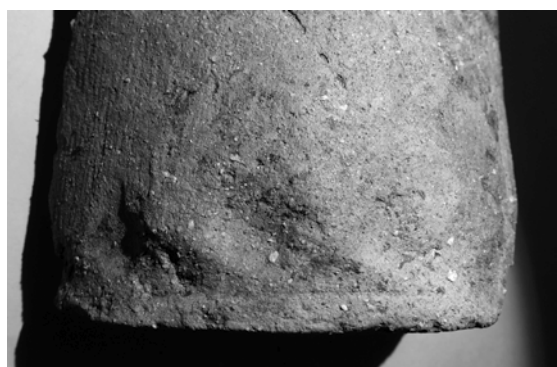
筆者もB類、とりわけ出現期のそれが執拗なまでに外面下端に回転ケズリを加える点は、回転台による製作工程と密接な関係があると推測する。ただしその目的は、単に厚くなった粘土をケズリ調整したというのではなく、ケズリによって消し去らなければならない何らかの製作痕跡がその範囲に付着していた可能性を考える。それを示唆するのが、外面下端にケズリが十分およんでいない個体において観察される同部分への連続的な強いユビオサエ痕跡である。橿原市新沢千塚166号墳出土埴輪において数多く確認でき (Fig. 17-4)、内藤元太はこれを底部調整として捉えるが (内藤2020)、166号墳例は摩滅が著しくタテハケ調整との先後関係は判然としない。これに対して、橿原市高所寺池遺跡出土例では、器面



1 外面下端の回転ケズリ（三倉堂遺跡）



2 外面下端の回転ケズリ（新沢千塚 166 号墳）



3 外面下端のユビオサエータテハケ→回転ケズリ
（高所寺池古墳群）



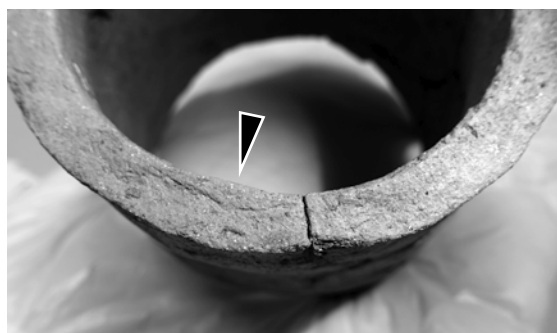
4 外面下端のユビオサエ（新沢千塚 166 号墳）



5 ナデ調整を示唆する平滑な底面（三倉堂遺跡）



6 ケズリ調整を示唆する底面（新沢千塚 166 号墳）



7 輪台技法を示唆する底面の接合痕
（新沢千塚 166 号墳）



8 輪台技法を示唆する底面の接合痕
（新沢千塚 166 号墳）

Fig. 17 B類底部に残る製作痕跡

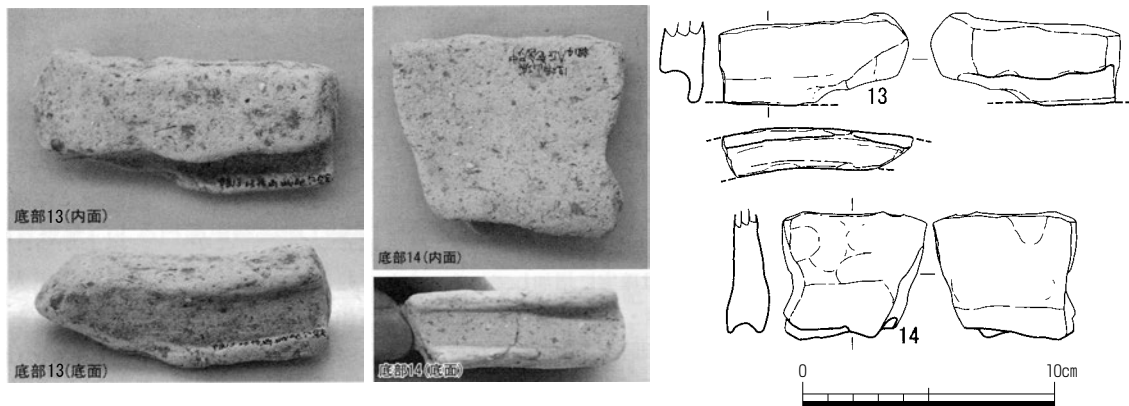


Fig. 18 長浜市横山城遺跡出土カマド形土器の輪台痕跡（辻川2016図2より転載）

の状態が良好なものにおいて、ユビオサエ→タテハケ→回転ケズリの順で重複関係を把握することができ（Fig. 17-3）、ユビオサエが製作の初期に施されたものであることが判明する。すなわち、外面下端のヘラケズリの目的は、同部分に集中的に施されたユビオサエ痕跡を製作の後半段階において消し去ることにあったとみられる。

こうした外面下端に念入りに施される強いユビオサエの類例として直ちに想起されるのが、輪台技法（淡輪技法）の輪台痕跡上部に残るユビオサエ痕跡である。基部の粘土帯を輪台に圧着させるためのユビオサエとみられ、当然のことながら外面一次調整のタテハケやタタキに先行する。一次調整のハケやタタキによって丁寧に消し去られる場合もあるが、淡輪地域や紀ノ川下流域の事例では比較的頻繁に観察される。淡輪技法のように蔓や枝を束ねた明瞭な輪台痕跡は視認できないものの、B類における外面下端への集中的なユビオサエは基部粘土を輪台へ貼付けた際の痕跡である可能性が考えられよう。であるならば、上述した必要以上に平滑な状態を呈するB類の底面は、回転台そのものではなく、輪台圧着時の痕跡である可能性が浮上する。あるいは輪台痕跡としての凹みや段は、底部調整時にあわせて消し去られていることも予想される。すなわち、底面の平滑な状態は段や凹みを取り去るべくケズリやナデが加えられたことに起因する可能性も考えられる（Fig. 17-5・6）。状況証拠ではあるが、内面のハケ調整の起点が底面よりも下方に迫り出す事例の存在は、ケズリ調整によって当初の底面が幾分かットされる場合があったことを示唆する。

さらに注目されるのは、稀にはあるが底面に基部成形のもととは異なる不自然な接合痕が散見される点である。R・L接合ないしはS・Z接合などと呼ばれる基部成形時の粘土帯接合痕は、接合ラインが斜めに底面を横断するが、問題の接合痕は局所的ではあるが底面の縁に平行するように走り、かつ底面本体に覆いかぶさるように圧着する（Fig. 17-7・8）。こうした痕跡は、回転台離脱後の底部調整時に削り取られずに部分的に残存した輪台への圧着痕跡が、埴輪を正位置で再設置した際に押し潰され底面に再び圧着した状況として理解することが可能である。B類では輪台痕跡の段や窪みが典型的な淡輪技法ほど明瞭ではなかったことになるが、この点に関しては辻川哲朗がカマド形土器の底面に見出した輪台痕跡の状況が参考になろう。すなわち辻川が例示した長浜市横山城遺跡出土カマド形土器では、輪台を真上から覆うように基部粘土が置かれた結果、底面は教科書的な輪台技法のように外側が高い段ではなく、浅いU字形の断面形を呈しており、内外縁の突出はごくわずかである（辻川2016）。B類の輪台技法も、

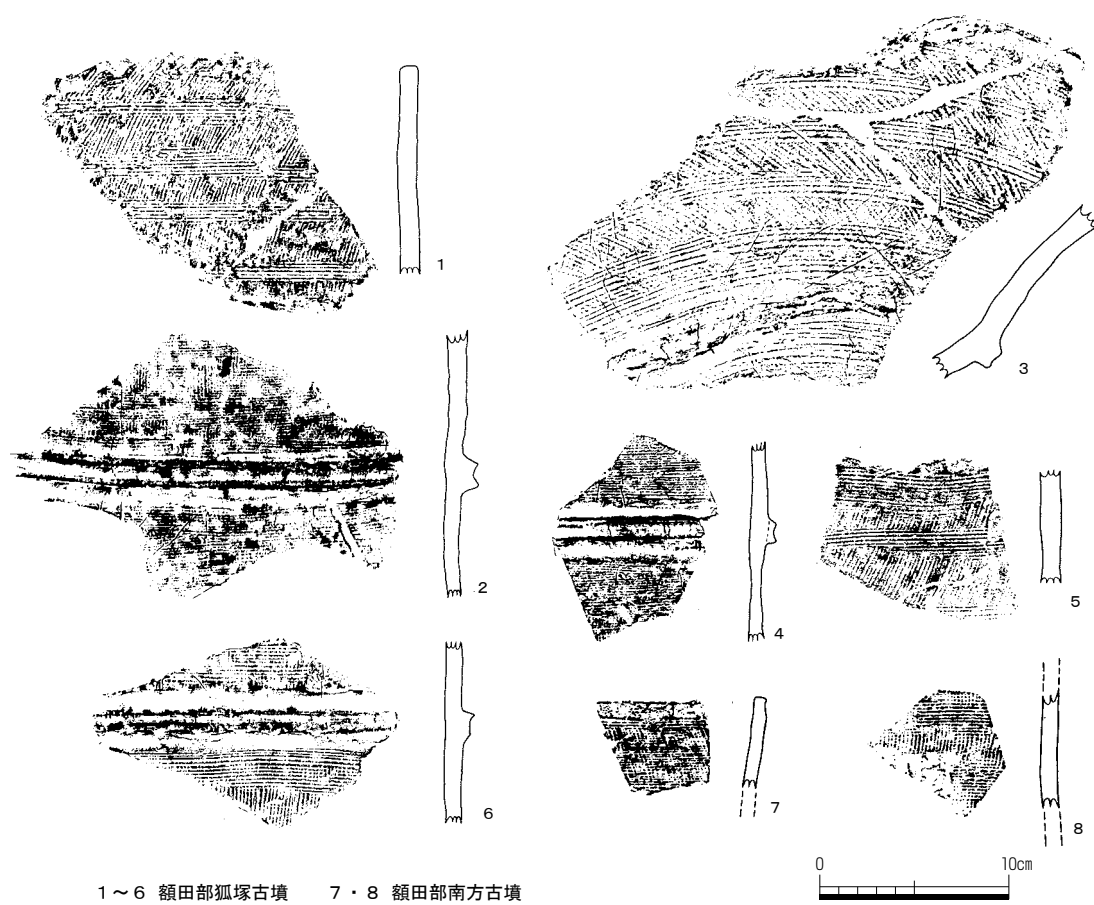


Fig. 19 C類の埴輪 1:4

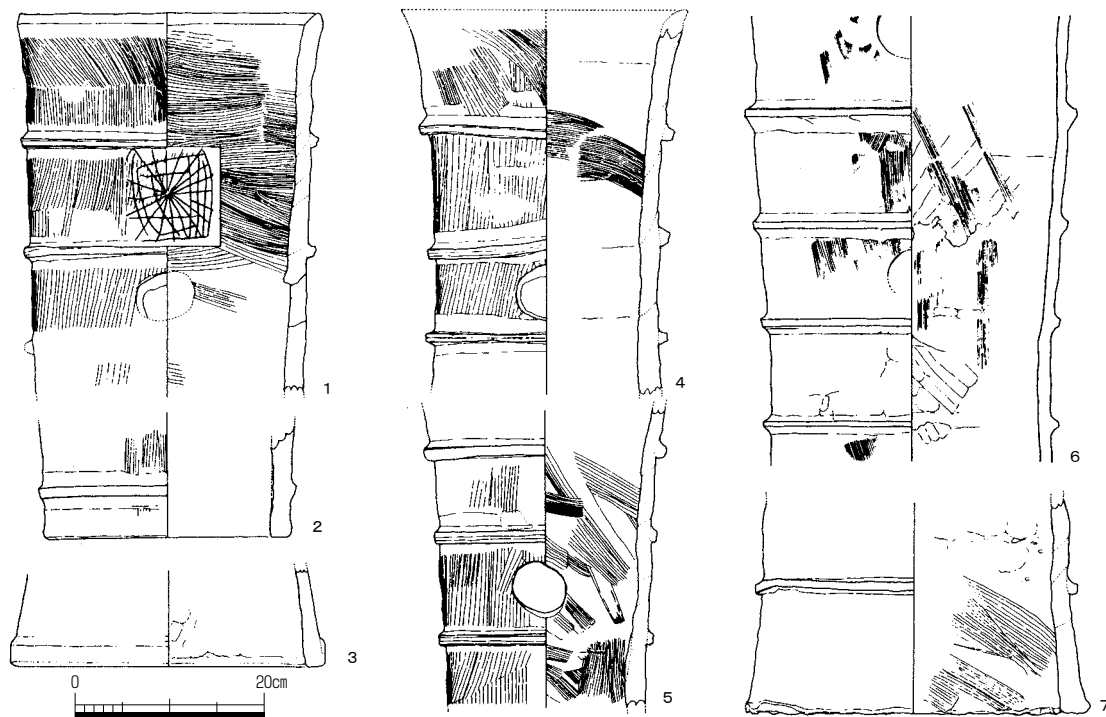


Fig. 20 D類（牧野古墳）の埴輪 1:8

こうした輪台の圧着痕跡が不明瞭となる方法であったとみられ、基本的には輪台取り外し後の底部調整により消し去られる性格のものであったと推測される。

小結 以上、B類（大和南部型）の特徴について、新たな所見も交えて論じてきたが、やや冗長となったため、ここで総括しておく。まず形態の特徴としては、突帯間隔に対し底部高が著しく高く、底部高 $=2\times$ 突帯間隔、突帯間隔 $\div$ 口縁部高を基本的なプロポーションとする。段構成は2条3段、3条4段が多いが、この点については後に詳述する。口縁部形態は、端部を内側に小さく肥厚する例が多いが、単純に収めるものも少量ある。

蹴轆轤状の回転台を右回転で使用し、外面は一次調整にタテハケ（下位では主軸が右に傾く）、二次調整に回転ヨコハケを施す。内面はナデないしナデのちタテハケ調整。突帯は総じて突出度が高く、割付に沈線を引く。突帯の成形は、いわゆる断続ナデ技法とは異なるが、ヨコナデ以前に右方向に断続的にユビを動かして粘土をナデ付ける手法が散見される。底部調整は、初期には外面下端に回転ケズリを施すが、やや遅れて外面板オサエ技法が現われ、その後、主流となる。焼成は軟質で、部分的に小規模な黒斑が付着する。

轆轤状の回転台を使用し、ヨコハケ、ケズリ調整に回転力を駆使する点、回転台離脱のための輪台技法の使用も示唆されることから、いわゆる須恵器系埴輪との親縁性が高いが、非窖窯焼成でタタキ技法が用いられない点において、狭義の須恵器系埴輪とするには難がある。既に指摘があるように奈良盆地南部に定着した渡来系の土器製作集団の関与が濃厚であるが（東影2019）、それとの詳細な関係解明が今後の課題である。

（3） C類

ごく少量ではあるが、奈良盆地内でも轆轤状の回転力を駆使した典型的な須恵器系埴輪が出土している。すなわち、大和郡山市額田部狐塚古墳では、高速の回転ヨコハケを施した還元焰焼成の円筒埴輪や蓋形埴輪が大量に出土している（Fig. 19）。特徴的な断面M字形の突帯形状からも、いわゆる尾張系埴輪の範疇に属するものとみてよく、ここではこれをC類としておく。近隣に所在する大和郡山市南方古墳からも通有のV群埴輪に交じって尾張系埴輪が出土しており、額田部地域の一角に尾張系埴輪の生産・消費拠点が存在した可能性が示唆される。

なお、田原本町羽子田6号墳における輪台技法を使用した埴輪も、広義の須恵器系埴輪の範疇に属すが、前述のB類（大和南部型）や尾張系埴輪とは系統を異にする。その系譜や製品流通の実態解明が待たれる。

（4） D類

烏土塚古墳や牧野古墳出土例を典型とするもので、器壁が分厚く重厚なつくりで、突帯の突出も高く、全体形状も不整形な点で、通有のV群円筒埴輪とは距離を置く一群である（Fig. 20）。鐘方分類の大和C類に該当し、いわゆる日置荘西町窯系の範疇で理解される場合が多い。ここまで述べてきたA～C類とは特徴が異なるものの、形態・技術系譜上の位置づけは不鮮明であり、日置荘西町窯との具体的関係も未解明である。烏土塚古墳や牧野古墳の築造年代がTK43～209型式期とされることから、奈良盆地

における主だった系統の生産終焉後に断片的に生産・供給された埴輪であることは間違いない。

2 奈良盆地における各系統の分布状況

以上にみた各系統の分布状況については、それぞれの解説において適宜、触れた部分もあるが、ここではあらためて、古墳の立地や群構造にも留意しながら、奈良盆地内における各系統の展開について確認していく。その際、古墳の立地や群構成を考慮し、(1) 小規模墳からなる古墳群、(2) 有力首長墳からなる古墳群、(3) 単独で立地する古墳、の三者に区分して様相をみていくことにする。

(1) 小規模墳からなる古墳群の事例

① 橿原市四条古墳群

中期末から造営を開始する古墳群で、中小の円・方墳（造出付を含む）からなる。これまでのところ14基が検出されているが、調査がおよんでいるのは全体のごく一部で、墓域は少なくとも直径600m以上の範囲に広がる。隣接する四条シナノ古墳群とあわせて、大規模な群集墳を形成しているものと推測される。四条古墳群からは、前述した各種系統がそれぞれ出土しており、当該期の埴輪の流通・消費状況を把握する上で極めて重要な事例といえる。以下、時系列に沿ってその内容を確認する。

Ⅳ期新相 これまでのところ7号墳出土埴輪が最も古く位置づけられる。前述したように円筒埴輪はⅤ群出現の直前段階に位置づけられるもので、底部調整を採用するものの、突帯は断続ナデ技法を用いないⅠ群である。B種ヨコハケの施効率が高く9割を超える。

Ⅴ期古相 2・8・10号墳が該当し、成立期のA類（Ⅴ群円筒埴輪）がともなう。未だB種ヨコハケを高い頻度でとどめるが、突帯はⅡ群（断続ナデ→板オサエ→ヨコナデ）で、底部調整も施工頻度が高まる。注目すべきは、2・8号墳ではB類（大和南部型）が共伴している点である。いずれも外面下端に回転ケズリを加える初期の特徴を備えており、器面調整は明瞭なハケメを残さず板ナデ状である点で共通する。

Ⅴ期中相 9号墳が該当する。A類は1点出土しているのみで、B種ヨコハケは省略されているものの、底部調整はない。2・8号墳と同様にB類が共伴するが、器面調整は通常のハケ調整である。底部調整も回転ケズリではなく板オサエであり、この点から2・8号墳よりもわずかに後出する可能性を指摘できる。

Ⅴ期新相 6号墳では、B類の共伴はみられないものの、Ⅴ群円筒埴輪においてAa類とAc類の2系統がともなって出土している。典型的なⅡ群無調整突帯（断続ナデ技法B新）の存在から、6号墳のⅤ群円筒埴輪の多くがAa類に属すること、さらにはその時期がⅤ期新相に下ることが判明する。これに対して、Ac類は、全形の判明するFig. 21-25によってその存在を確認できる。2～4段目に連段直交で円形透孔を配置し、突帯は突出度が高く、底部調整はない。口縁部はユビオサエの凹凸を明瞭に残すかたちで粘土帯を貼り付ける典型的な貼付押圧口縁である。胎土も白色基調であり、盆地北部からの搬入品の可能性が高い。同様の胎土は、突帯の突出度が高い一部の円筒埴輪片や蓋・馬・家形埴輪にも認められる。馬形埴輪は前述した音乗谷古墳やヤイ古墳と同様に、頭部側面の粘土板が顎部分で下方へ拡張する特徴が認められる。

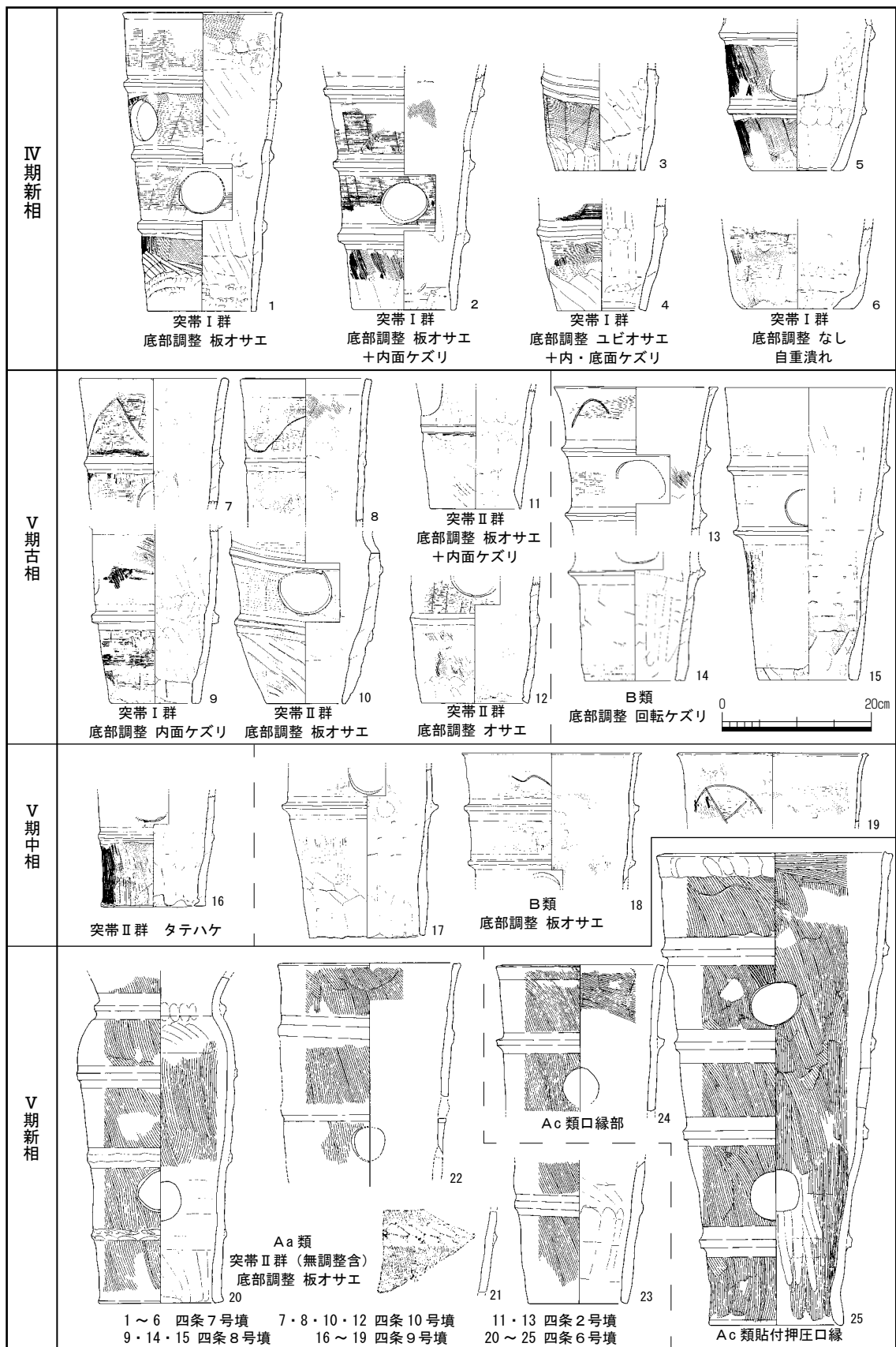


Fig. 21 四条古墳群における埴輪の変遷 1:8

小結 四条古墳群では、各時期を通じてA類が出土しているものの、実に様々な系統の埴輪が入り乱れるように流入しており、古墳群で核となる系統の埴輪を見出し難い状況にある。むしろこの点は、四条古墳群のような古式群集墳では、古墳群独自の埴輪生産は展開しておらず、一方的に外部から製品供給を受ける体制にあったことを物語っているといえよう。

② 橿原市新沢千塚古墳群

古式群集墳として学史的にも著名であるが、埴輪の詳細については未公表のことが多い。埴輪の全容が判明するものとしては、166号墳や175号墳がある。

166号墳では、B類を主体としつつ、A類も一定量出土しており、四条古墳群と同様に系統の混在状況を確認できる。B類は、前述のように外面下端にユビオサエを集中的に施すものが多いが、底部調整の回転ケズリでこれを消すものも一定量含まれる。共伴するA類の突帯は、板オサエ整形のちヨコナデ調整を加えるⅡ群であり、割付に凹線を引くものもある。底部調整は板オサエで、底面を変形させるものの、さほど粗雑化してはいない。B種ヨコハケを省略せず高頻度で施すこと、および共伴須恵器の型式からも、V期古相に位置づけられる。

175号墳では公表されている36点すべてがB類で構成される。底部調整は、回転ケズリに加えて板オサエが含まれることから166号墳よりも新しく、共伴須恵器の型式からも、V期中相に位置づけられよう。

小結 新沢千塚古墳群では、B類が高い比率で出土するものの、166号墳におけるA類の共伴に加えて、115号墳や158号墳でもA類が出土していることから、やはり古墳群として特定の系統の埴輪を集中的に生産していた状況を見出すことができない。四条古墳群と同様に外部から一方的に製品供給を受けていたとみられる。

③ 橿原市高所寺池古墳群

藤原宮下層では埴輪を伴う埋没古墳が各所で検出されているが、宮東南隅の高所寺池の周辺では、直径20m前後の円墳が近接して3基検出されている（飛鳥藤原第131次調査）。うち2基は埴輪をとまっており、SD9850からB類が、SD9870からはA・B類が共伴して出土している。SD9850出土のB類は、底部調整は不鮮明で、外面下端に回転台装着時のユビオサエを残す。SD9850に重複する攪乱坑から出土した底部片には、前述のようにユビオサエ→タテハケ→回転ケズリの手順が確認できるものがある（Fig. 17-3）。SD9870出土のA類は、外面にB種ヨコハケを残し、底部調整は内面下端をヘラケズリする。TK23型式の有蓋高杯が伴うことから、V期古相に位置づけられる。

高所寺池遺跡検出の小円墳は、いずれも周溝が全周せず削平が著しいことに加え、高所寺池北辺部（第118次調査）の包含層からも同時期の埴輪が出土していることから、周囲には同様の小規模墳が存在したことが確実視される。高所寺池北方の第188-7次調査区でも同時期の小古墳の周溝の一部が検出され、西方の第201-3次調査区では遺構は不明確ながらV期古相段階のA類とB類の破片がまとまって出土していることから、高所寺池一帯は四条古墳群や新沢千塚古墳群と同様、古式群集墳の様相を呈していたとみられる。埴輪も両古墳群と同じくA・B類の双方が出土しており、両者の生産地から供給を受けていたとみられる。

④ 大和高田市池田古墳群

中・小型の方墳・円墳で構成される古墳群。1～3・6号墳では黒斑を有するⅢ期の埴輪が出土しており、造墓の開始は中期前葉にまでさかのぼる。古墳群に隣接する墳丘長約75mの前方後円墳・狐井塚古墳が中期後葉（Ⅳ期新相）の築造であるものの、中期中・後葉の中小古墳は未検出で、後期以降に再び造墓が活発化して古式群集墳的な様相を呈するに至る。

後期古墳としては、4・5・8号墳がⅤ期古相、9号墳がやや遅れてⅤ期中相に位置付けられる。各古墳の埴輪は、8号墳で2条3段のB類1個体が出土していることを除くといずれもA類である。突帯はⅡ群で、断続ナデによる貼り付け後に板オサエ整形を介在しているとみられる。9号墳からは少量ながら板オサエ整形を施す無調整突帯（断続ナデ技法B古）が出土しており（Fig. 1-6）、Aa類に属することが判明する。8号墳出土のB類は、口縁端部に肥厚がみられず、底部調整に回転ケズリを施す古相のものである。A類のヨコハケの残存率から、Ⅴ期古相でも4・8号墳が5号墳にやや先行するとみられる。

いずれにしても、後期の池田古墳群ではA類が主体的に供給され、B類は存在するものの極めて客体的である点に特色がある。四条古墳群や新沢千塚古墳群でも同様にA・B類が共伴するが、B類の比率が著しく高い点で様相を異にする。この点はB類の流通を考える上で示唆的である。なお、池田古墳群のA類で主体となる胎土は、素地が白～灰白色基調で風化白色礫や褐色くさり礫に加えて、微量ながら金雲母を含む点に特徴があり、四条古墳群や新沢千塚古墳群で主体となるA類とは胎土を異にするとみられる。

⑤ 大和高田市三倉堂遺跡

古墳時代後期の木棺6基が出土したことで著名であるが、木棺は1～3号棺がそれぞれ単独で、4～6号棺が別地点において一括で出土しており、少なくとも4基の古墳が存在したことが知られる。土器棺が検出されていることから、小規模な古墳がまとまって墓域を形成していた可能性が高い。

埴輪は4～6号棺検出地点の20m程北で限定的に5個体が出土している。いずれもB類で、うち2本は朝顔形埴輪で、肩部に波形のヘラ記号を2カ所描く。口縁部まで遺存する円筒埴輪2個体にも波形のヘラ記号が各1カ所残る。5個体は、内外面調整のあり方、突帯下面に右上がりの断続的なナデ付け痕跡を残す点、透孔は右回りの穿孔で、時計でいうところの11時の位置に工具を抜いた痕跡を明瞭に残す点が共通する。同工品、ないしは同一グループの製品とみて間違いはない。ほかに埴輪を樹立する古墳が存在しないなかで、B類が生産時の単位を崩さずに限定的に搬入された状況が読み取れる。

⑥ 桜井市赤尾崩谷古墳群

鳥見山北麓の尾根上に築かれた古墳群。尾根に沿って5基が列状に検出されており、1・3～4号墳が方墳で、2号墳が円墳（直径12m）である。埴輪を有するのはその2号墳のみで、B類が限定的に供給されている。口縁部にX字状のヘラ記号を描き、底部調整に板オサエを加える。板オサエ痕跡には、単位内に棒状の隆起痕を残すものがある。共伴須恵器からⅤ期新相には下らず、中相の所産とみられる。三倉堂古墳群と同様、古墳群として埴輪を生産した形跡はなく、2号墳にのみB類が限定的に供給された状況がみてとれる。

（2） 有力首長墳からなる古墳群の事例

後期の奈良盆地において大型の前方後円墳が集中するエリアは、盆地東部の天理市布留遺跡の周辺に

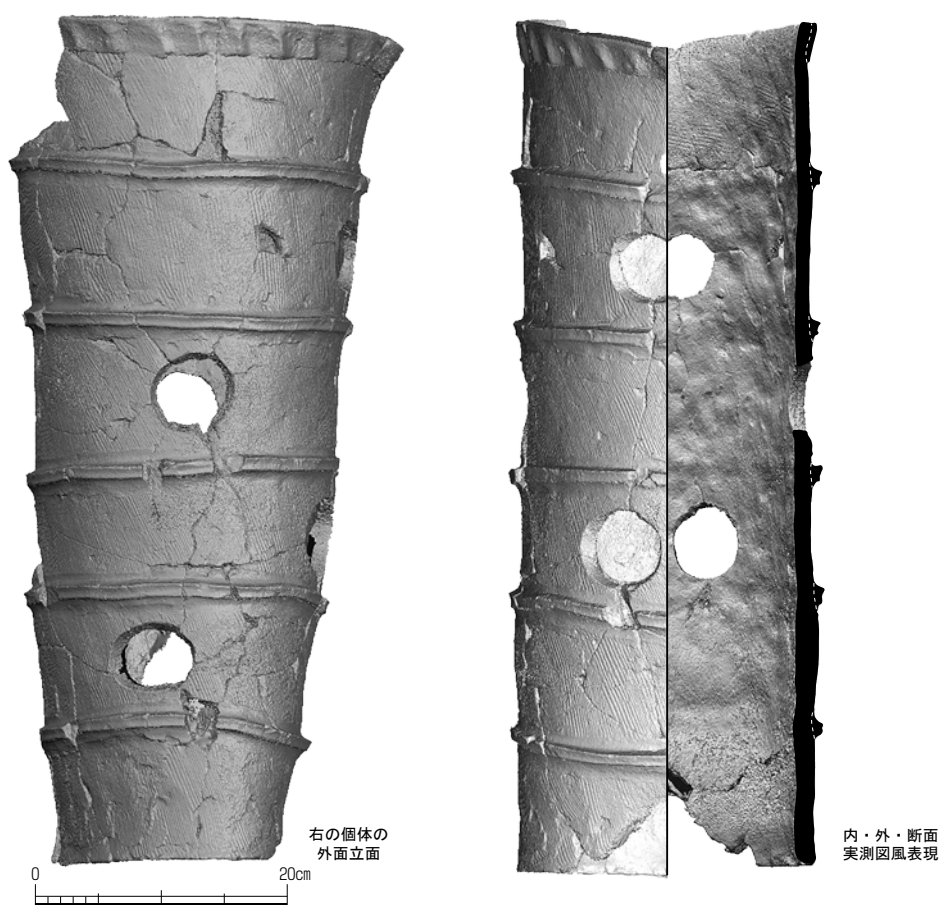


Fig. 22 別所鎌子塚古墳出土埴輪の三次元モデル画像 1:6

限定される。大型古墳は布留遺跡を挟んで北方、南方に分かれて展開している。

① 別所古墳群

北方の一群は、全体を「石上・豊田古墳群」あるいは「石上古墳群」と呼称されることもあるが、ここでは古墳の分布が東西に偏在する状況を重視し、東半を狭義の「石上・豊田古墳群」、西半を「別所古墳群」と呼び分ける石田大輔の区分案（石田2018・2020）に従う。石上・豊田古墳群中の石上大塚古墳、ウナナリ古墳の2基の前方後円墳は、墳丘長110m前後を測り、群中の盟主墳であることが明らかであるが、両古墳は後期後葉の築造とみられ、埴輪の様相は有無も含めて判然としない。これに対して西半の別所古墳群では、別所鎌子塚古墳、袋塚古墳において埴輪の様相が判明している。

別所鎌子塚古墳 墳丘長57mの前方後円墳。墳丘本体に対する本格的な調査はなされていないが、後円部南側の隣接地で同古墳所用とみられる全形の判明する円筒埴輪が3個体出土している。口縁部まで残存するのは1点（Fig. 22）であるが、いずれも5条6段構成とみられ、2～5段目に連段直交で円形透孔を配置する。外面調整は一次ナナメハケで、底部調整はみられない。突帯はV群としては突出度が高いが、貼付は大きく波打ち、剥離面にも割付痕跡はみられない。口縁部は貼付押圧口縁で、ユビオサエ痕跡を明瞭にとどめる。典型的なAc類であり、胎土もAc類に特有の白色基調のものであることから、搬入品の可能性が高い。一般的にAc類は、貼付口縁の有無を問わず、4条5段の製品が多いが、本例を通じて5条6段以上の大型品も存在することが判明する。

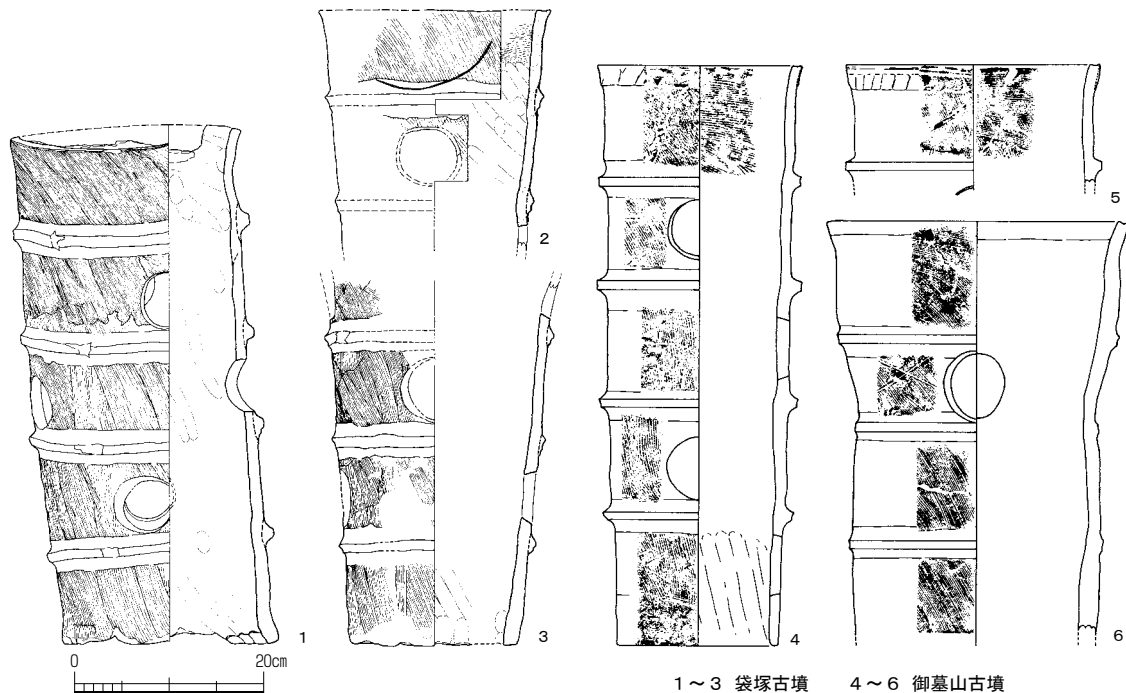


Fig. 23 袋塚古墳と御墓山古墳の埴輪 1:8

袋塚古墳 別所鍾子塚古墳の南に対峙するように築かれた前方後円墳で、前方部端は未確認ながら墳丘長は55～65mと推測されている。円筒埴輪は全形の判明するものが1個体あり、4条5段構成で連段穿孔である。そのほかの個体でも2～4段目に連段穿孔するものが散見できる (Fig. 23-1～3)。総じて突帯の突出度が高い。底部は未調整のものが多く、板オサエを施す場合でも底面が変形しない程度の調整にとどまる。共伴する形象埴輪も、入母屋造の家形埴輪が平面隅丸方形ないしは楕円形を呈する点や、石見型埴輪形象部上辺の粘土帯や大刀形埴輪のものとみられる底部の下端突帯にユビオサエ痕跡を残す (Fig. 13-1・2) など、Ac類の特徴が明瞭である。

御墓山古墳 別所鍾子塚古墳、袋塚古墳からさらに西へ2kmほど離れた平地部に単独で立地するが、墳丘長74mを測る大型前方後円墳であり、布留遺跡周辺の首長墳とも無関係ではないと考えられるため、比較も兼ねて出土埴輪を検討しておく。

円筒埴輪は、貼付口縁にユビオサエ痕跡を残すAc類が出土している。Fig. 23-4は4条5段構成で、1～4段目に連段直交で円形透孔を配置する。底面には切断痕跡があり、現状の最下段に透孔を穿っていることから、当初は6段構成以上で製作されたのち、何らかの理由で現底面部分以下を切断されたものとみられる。現最下段外面には切断後に底部調整風にユビナデを加えているが、底面の変形はほとんど生じていない。このほかにも、貼付口縁でない通有の口縁部をもつ4条5段構成のAc類がある。やはり突帯の突出度が高く、底部調整は施さない。一方、これらとは別に突帯が低平でヨコナデの上下に断続ナデの爪痕を明瞭に残す個体も散見される (Fig. 23-6)。破片資料中にはⅡ群無調整突帯が存在している (Fig. 1-8) ことから、Aa類の共伴が確実視される。Ⅱ群無調整突帯は、板オサエ整形を省略する典型的な断続ナデ技法Bであり、V期新相に位置づけられる。

なお、形象埴輪は破片も踏めて存在が不明瞭である一方で、鳥、大刀、笠、翳、石見型、などの木製

品が大量に出土しており、木製品で形象埴輪を補完していた可能性がある。

小結 このほかに後期の大型古墳において、埴輪の詳しい様相が判明するものがないため、古墳群全体の埴輪の展開を跡付けることは困難であるが、布留遺跡北方の大型古墳では総じてAc類の埴輪の受容が目立つ点を指摘できる。ただしこの点をもって布留遺跡周辺でのAc類の主体的生産を論じるのは、別所鐘子塚古墳における白色基調の胎土の存在からも早計であろう。立地がやや西に寄るものの御墓山古墳では、Ac類に加えて、特徴が相反するAa類が共伴しており、双方の生産地から製品供給を受けている。Ac類の展開に関する私見は、盆地全体の様相を踏まえて後述することにする。

② 杣之内古墳群

布留遺跡南方では、西乗鞍古墳、東乗鞍古墳、小墓古墳の3基の大型前方後円墳が後期に連続して築かれており、前期や終末期の古墳も含めて全体が杣之内古墳群として把握されている。西乗鞍古墳、東乗鞍古墳、小墓古墳の3基については一連の首長系譜と目されるが、各古墳の築造順序には諸説あり、定見が得られていない。現段階において埴輪の様相が詳しく判明しているのは、西乗鞍古墳と小墓古墳の二者である。

西乗鞍古墳 墳丘長118mを測る大型前方後円墳で、墳丘外周部の調査により、埴輪、須恵器が出土している (Fig. 24-1～8)。

円筒埴輪は、全形の判明する6条7段構成の大型品があり、透孔は3・4・6段目に円形透孔を穿つ。3・4段目が連段穿孔となるが、3段目に透孔を配置することを原則とする大型品では局所的に連段穿孔となる場合がしばしばある。4・6段目間が隔段直交配置となることから、全体としては隔段穿孔として理解できる。底部径は約23cmであるが、表採資料にもほぼ同じ底部径で3段目に透孔を穿つものがあり、これらを通じて当古墳の標準的な段構成および規格を知ることができる。

突帯は総じて突出度が高い。破片資料の中には、典型的な突帯Ⅱ群（断続ナデ技法A）も少量確認できるが、大半は断続ナデを用いないⅠ群的な突帯である。ただしそれらも、突帯の貼付けが水平でないことに加え、底部高や突帯間隔が不均等であることから、割付技法を用いていない可能性が高い。底部調整の施工率も低く、一見するとⅣ群的な古い様相が目につくが、この点は当古墳の埴輪の大部分が大型品で構成されるためであろう。蓋形埴輪の笠部、立飾には線刻が残るが、外面調整にB種ヨコハケはみられないこと、TK47～MT15型式に比定できる須恵器が出土していることから、Ⅴ期中相の所産と考えられる。

系統の比定は困難であるが、透孔が隔段穿孔であることから、大部分はAc類を除くA類のいずれかの系統に属すとみられる。ただし、口縁部片の中には、ユビオサエ痕を残す貼付口縁が出土しており、Ac類が一定量共伴している可能性は残る。

小墓古墳 墳丘長約85mの前方後円墳で、墳丘外周の調査により、大量の円筒・形象埴輪と木製品が出土している。形象埴輪には、円柱を伴う高床式の家形埴輪をはじめ、蓋、靱、鶏、水鳥、人物、盾持人などが出土しており、木製品も笠、盾、石見型、翳、大刀、鉾など、多種多彩なものが出土している。円筒埴輪は、5条6段構成を基本としつつ、一部に貼付口縁を有する7段以上の大型品がともなう (Fig. 24-9・10)。突帯は総じて扁平でヨコナデの上下に断続ナデによる貼付痕跡を残すものが多い。Ⅱ群無調整突帯（断続ナデ技法B新）の存在が確認できることから、Ⅴ期新相に比定できる。底部調整は高

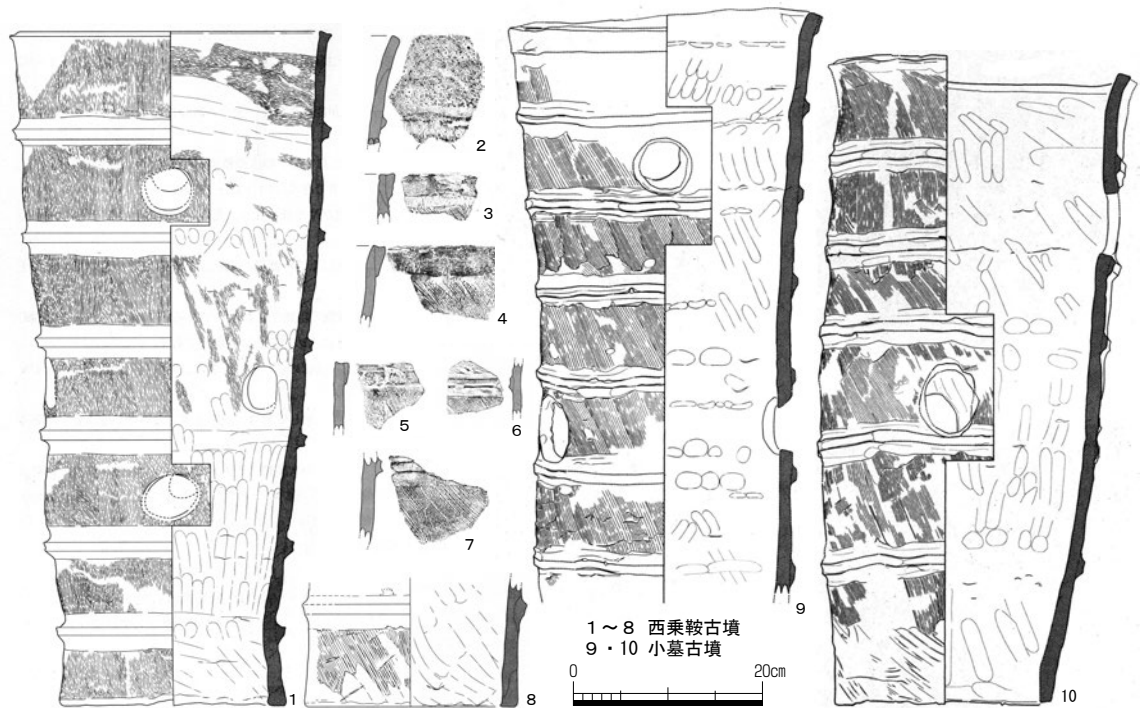


Fig. 24 杣之内古墳群の埴輪 1:8

い頻度で板オサエが施される。ヘラ記号は15種以上あり、供給元の製作単位の豊富さを裏付ける。貼付口縁はAc類特有のユビオサエ痕は見られず、いずれも平滑に仕上げるが、通常よりも幅太のもの（幅5cm前後）が目立ち、仕上げもナデが全面におよばずタテハケを残すものや、ヨコハケ（A・B種）で仕上げるものがあるなど特徴的である。Ⅱ群無調整突帯や底部調整板オサエの存在から大部分はAa類に属することが確実であるが、そのほかの系統が共伴している可能性は否定できない。とりわけ、笠部や軸受端部の突帯にユビオサエ痕を残す蓋形埴輪については、前述のようにAc類との関係が考慮される。

小結 以上、後期の杣之内古墳群の埴輪の様相に関しては、東乗鞍古墳の埴輪の様相が不明な点で課題を残すが、Ⅴ期中相に比定できる西乗鞍古墳と新相の小墓古墳では、さほど大きな時間差は見込めないにもかかわらず、その内容は大きく変化している。北方の別所、石上・豊田古墳群も含めて、布留遺跡を取り巻くように展開するこれら後期の一大古墳群については、一般的に物部氏の奥津城とする見方が有力であるが、そうした特定の氏族・部族的結合を反映するような古墳群においても、埴輪の系統は単一ではなく、錯綜する状況にあることが確認できる。別所、杣之内といった各古墳群単位においても生産体制が維持・管理された形跡を見出すことはできず、製品供給ないしは技術支援を外部へ依存していた様子がうかがえる。

（3） 単独で立地する古墳の事例

市尾墓山古墳 初期の畿内型横穴式石室を内包する墳丘長約66mの前方後円墳で、盆地南縁に位置し、紀伊へとつながる巨勢谷の入口部に立地する。南西200mには墳丘長52mの市尾宮塚古墳が所在するが埴輪は有しておらず、墓山古墳は埴輪樹立古墳としては単独での立地といえる。円筒埴輪は6条5段と5条6段の2者の存在が確認でき、3・5段目に隔段直交で円形透孔を配置するものが多い（Fig. 25-

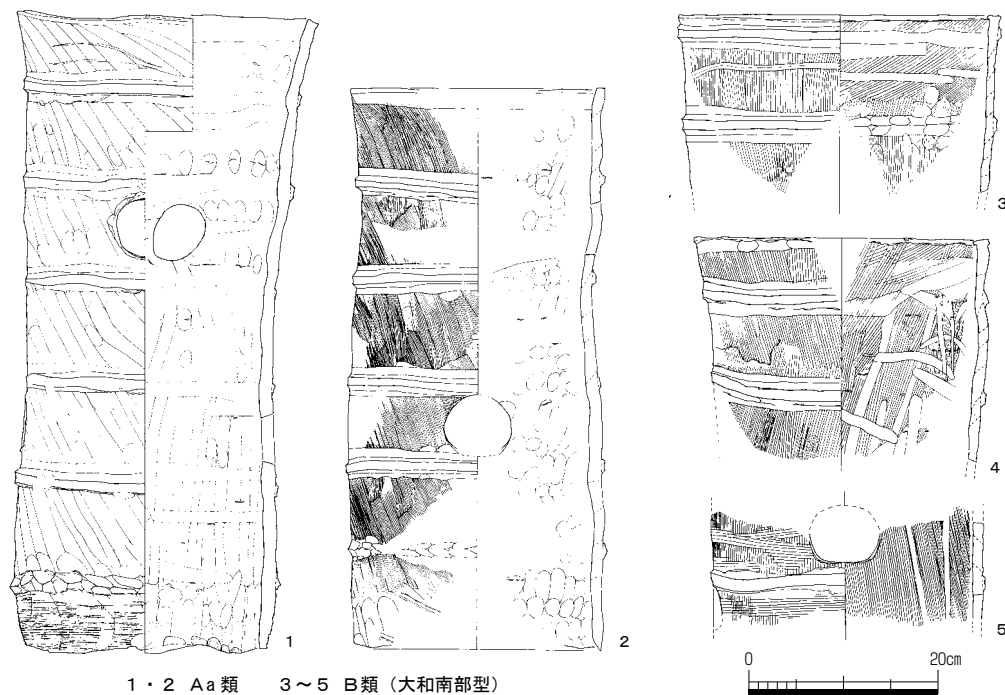


Fig. 25 市尾墓山古墳のAa類とB類 1:8

1・2)。突帯はⅡ群で、最下段が無調整（断続ナデ技法B新）の個体が多い。大部分がAa類に属し、V期新相に位置づけられる。

一方で外面に回転ヨコハケを有し、口縁端部を肥厚するB類の特徴をもつ埴輪も一定量出土している（Fig. 25-3～5）。この一般的なV群とは異なる異系統の埴輪の存在を見出した辻川哲朗は、これを「紀伊・大和南部型」として積極的に評価するが（辻川2010b、2012）、「大和南部型」とするのに消極的な意見もある（内藤2018）。おそらく慎重論の多くは、B類が通常、2条3段や3条4段の小型品として製作され、主として群集墳に供給されることを重視し、市尾墓山例がB類としては現状、奈良盆地では例をみない大型品であることを問題視しているものと推測される。しかしながら、後述のように、埴輪の段構成を決定づける論理は生産体制に起因する系統とは直接的な関係がないと考える。現状では、V期新相段階で外面に回転ヨコハケを施す系統としては、B類を置いてほかにはない。口縁端部が内側に肥厚する点、タテハケの起点が右上がりとなる特徴からも、この一群の埴輪はB類、すなわち「大和南部型」とみて間違いない。

このように、Aa類に少量のB類が共伴する市尾墓山古墳の埴輪の構成は、単独で立地する首長墳においても埴輪の構成は必ずしも単一とはならないことを示す好例として評価できる。さらに埴輪以外にも、鳥形、笠形、石見型などの木製品が加わることを踏まえると、市尾墓山古墳のために新たに単独で生産体制が整備されたのではなく、既存の生産拠点から必要に応じて各種埴輪類の供給を受けていたのが実態と考えられる。

水晶塚古墳 盆地中央部に位置する墳丘長50mの帆立貝形古墳。約1km東に位置する星塚1・2号墳とともに、菅原東窯製品の消費古墳のひとつとして知られてきた（坂編2006）。同古墳の埴輪は、ヘラ記号および器種構成から2群に大別される（田中2013）。

田中分類のA類は、普通円筒埴輪のみからなり、横倒しにしたS字に左下がりの斜線を組み合わせた特徴的なヘラ記号を描く。3条4段と4条5段のものがあり、後者では透孔が2・4段目に隔段直交で配置される。突帯はⅡ群で無調整突帯はみられない。底部調整は板オサエで、底面は完全に潰れて波打ち、断面尖底となるものが多い。

田中分類のB類は、貼付口縁をもつ円筒埴輪と朝顔形埴輪からなり、ヘラ記号は横倒しにしたS字形でA類のような斜線は引かない。貼付口縁はユビオサエ痕跡を残す。突帯は断続ナデによる貼付痕跡が散見されるが、総じて突出度が高い。全形が判明するものがないため、底部調整の様相は不明である。透孔は一部例外があるが大部分が連段穿孔となる。

以上の大別2群を本書の系統分類に位置づけると、田中A類はAb類、B類がAc類に該当する。異なる系統の埴輪が共存することになるが、実際のところヘラ記号の一致や同ハケ関係が確認される確実な菅原東窯産埴輪は（本書付論I参照）は田中A類（Ab類）のみである。田中は両者が器種構成を補完する関係にある点に着目し、菅原東窯に一致するヘラ記号が見られないAc類についても菅原東窯産の可能性を考えたが、当古墳のAc類もやはり白色基調の胎土のものが多くを占めており、平城山周辺の異なる窯から供給された製品の可能性が高い。全体的な特徴が類似し、ヘラ記号も一致する製品が前述の四条6号墳から出土し（Fig. 12-3～5）、かつそこではAa類が共伴している点（Fig. 21-20～25）は、Ac類がAa類やAb類とは別系統として各古墳に供給されていた状況を裏付けていよう。

なお、田中が着目した機種構成の補完関係についても、それが異なる生産地間であっても受注に関する情報共有がなされていれば実現可能であったと考える。Ac類は朝顔形埴輪を除くと、貼付押圧口縁の製品に集中するが、この点は蓋形埴輪などを載せる器種として同製品を集中的に特定の窯に発注した可能性を示唆する。実際に水晶塚古墳出土の蓋形埴輪は、Ac類との関連が推定される軸受端部の粘土帯にユビオサエ痕を残すタイプであることから、蓋形埴輪とAc類がセットで供給された可能性が十分考えられる。ただし立飾は、ナデ調整され、頂部に一条の線刻を刻む特徴を有しており、菅原東窯出土例との共通性が指摘されている（田中2013、木村2018）。各系統間の異同を見据えた形象埴輪の体系的な特徴の整理が今後の課題となろう。

水晶塚古墳では、このほかにも少量ながら、底部調整が内面ケズリでAd類となる可能性があるものや、外面B種ヨコハケ調整で突帯の突出度が高く、最上段に連弧状の線刻を描くもの、口縁部内面に×形のヘラ記号で描くものなどがある。また、鳥形、笠形、石見型などの木製品も出土している。盆地中央部の中小古墳では、核となる拠点の生産地に加えて、さらに複数の生産地からも補足的、多元的に製品供給を受けていた可能性が示唆される。

3 奈良盆地における後期の埴輪生産体制とその背景

(1) 奈良盆地における後期の生産・供給体制

前節では古墳の立地状況を、(1) 小規模墳からなる古墳群、(2) 有力首長墳からなる古墳群、(3) 単独で立地する古墳、の3者に区分した上で、それぞれのパターンの代表的な事例を通じて各系統の分

Ⅲ 奈良盆地における後期の埴輪生産と系統

Tab. 1 奈良盆地の後期古墳における円筒埴輪の諸系統

No.		古墳名	所在地	墳形	規模(m)	段数	系統
1	北 部	音乗谷古墳	木津川市相楽台	帆立貝形	22	5	Ac類
2		奈良少年院古墳	奈良市秋篠町	—	—	5?	Ac類
3		ヤイ古墳	奈良市法蓮町	前方後円墳	24	—	Ab類・Ac類
4		率川古墳	奈良市本小守町	—	—	5+	Ab類?
5		平城515次SD10416	奈良市二条大路南	—	—	—	Ab類
6	中 央 部	開古墳	大和郡山市本庄町・天井町	—	—	5	Ad類
7		額田部孤塚古墳	大和郡山市額田部北町	前方後円墳	50	—	C類
8		額田部南方古墳	大和郡山市額田部北町	円	20	—	A類・C類
9		水晶塚古墳	大和郡山市八条町	帆立貝形	50	5・4	Ab類・Ac類
10		星塚1号墳	天理市二階堂上ノ庄町	帆立貝形	37	5?	Ab類
11		星塚2号墳	天理市二階堂上ノ庄町	帆立貝形	36	5?	Ab類
12		岩室池古墳	天理市岩室町	前方後円墳	55?	6・5	Ac類
13		佐々木塚古墳	川西町結崎	前方後円墳	45	5	Ad類
14		三宅瓢箪山古墳	三宅町伴堂	前方後円墳	40	5	A類
15		石見遺跡	三宅町石見	帆立貝形	35+	5・4	Aa類
16		黒田大塚古墳	田原本町黒田	前方後円墳	70	6+	A類
17		笹鉾山1号墳	田原本町八尾	前方後円墳	50+	6	Aa類
18		笹鉾山2号墳	田原本町八尾	円	22	4	Aa類
19		小坂里中古墳	田原本町小坂	円	22	4・3	Ad類
20		羽子田1号墳	田原本町東羽子田	前方後円墳	—	6+	A類
21	東 部	別所鐘子塚古墳	天理市別所町	前方後円墳	57	6	Ac類
22		袋塚古墳	天理市別所町	前方後円墳	55	5	Ac類
23		御墓山古墳	天理市上総町	前方後円墳	74	6+・(5)	Aa類・Ac類
24		小墓古墳	天理市杣之内町	前方後円墳	85	7+・6	Aa類
25		西乗鞍古墳	天理市杣之内町	前方後円墳	118	7	A類
26	東 南 部	勝山東古墳	桜井市勝山	方?	21+	4?	Ad類
27		纏向石塚東古墳	桜井市太田	円	16.5	4	A類
28		毘沙門塚古墳	桜井市茅原	前方後円墳	45	—	Aa類
29		赤尾崩谷2号墳	桜井市赤尾	円	12	3	B類
30		八重ヶ谷1号墳	桜井市山田	円	10	—	B類
31	南 部	酒船石遺跡	明日香村岡	—	—	—	Aa類・B類
32		興善寺古墳	橿原市形成外町	円	13	—	B類
33		高所寺池SD9850	橿原市別所町	円	20	—	B類
34		高所寺池SD9870	橿原市別所町	円	20	—	A類・B類
35		四条2号墳	橿原市四条	円	28	4?	A類・B類
36		四条6号墳	橿原市四条	円	18	4・(5)	Aa類・Ac類
37		四条7号墳	橿原市四条	円?	45?	4	A類
38		四条8号墳	橿原市四条	円	13.5	3	A類・B類
39		四条9号墳	橿原市四条	円	26	4?	A類・B類
40		四条10号墳	橿原市四条	方	12	—	A類
41		内膳4号墳	橿原市内膳町	方?	20+	4	Aa類・B類
42		新沢千塚166号墳	橿原市川西町	円	18	4・3	A類・B類
43		新沢千塚175号墳	橿原市川西町	円	16.5	4・3	B類
44		新沢千塚225号墳	橿原市川西町	円	12	—	B類
45		鳥屋ミサンザイ古墳	橿原市鳥屋町	前方後円墳	130	—	Aa類
46		観覺寺島ヶ峰1号墳	高取町観覺寺	円	19	4	B類
47		市尾墓山古墳	高取町市尾	前方後円墳	66	7・6	Aa類・B類
48		イノヲク5号墳	高取町藤井	円	16	—	B類
49		イノヲク6号墳	高取町藤井	円	16	—	B類
50		イノヲク12号墳	高取町藤井	円	20	—	B類
51		谷田深谷1号墳	高取町谷田	円	15	3	B類
52	西 南 部	まるこ山古墳	広陵町広瀬	帆立貝形	30+	5?	Aa類
53		牧野古墳	広陵町三吉	円	45	6+	D類
54		三倉堂遺跡	大和高田市西三倉堂	—	—	3	B類
55		池田4号墳	大和高田市池田	前方後円墳	—	—	A類
56		池田5号墳	大和高田市池田	円	—	4	A類
57		池田8号墳	大和高田市池田	方	—	4・3	A類・B類
58		池田9号墳	大和高田市池田	方	—	—	Aa類
59		下田東1号墳	香芝市下田東	方	21	4	Aa類
60		狐井城山古墳	香芝市狐井	前方後円墳	140	—	Aa類
61		北花内大塚古墳	葛城市北花内	前方後円墳	90	—	Aa類
62		石光山17号墳	葛城市忍海	帆立貝形	25	4	A類
63		石光山20号墳	葛城市忍海	円	14	4	B類
64		寺口忍海D27号墳	葛城市寺口	帆立貝形	20	5	A類
65		寺口忍海H19号墳	葛城市寺口	円	13	—	B類
66		巨勢山460号墳	御所市室	円	15	3+	B類

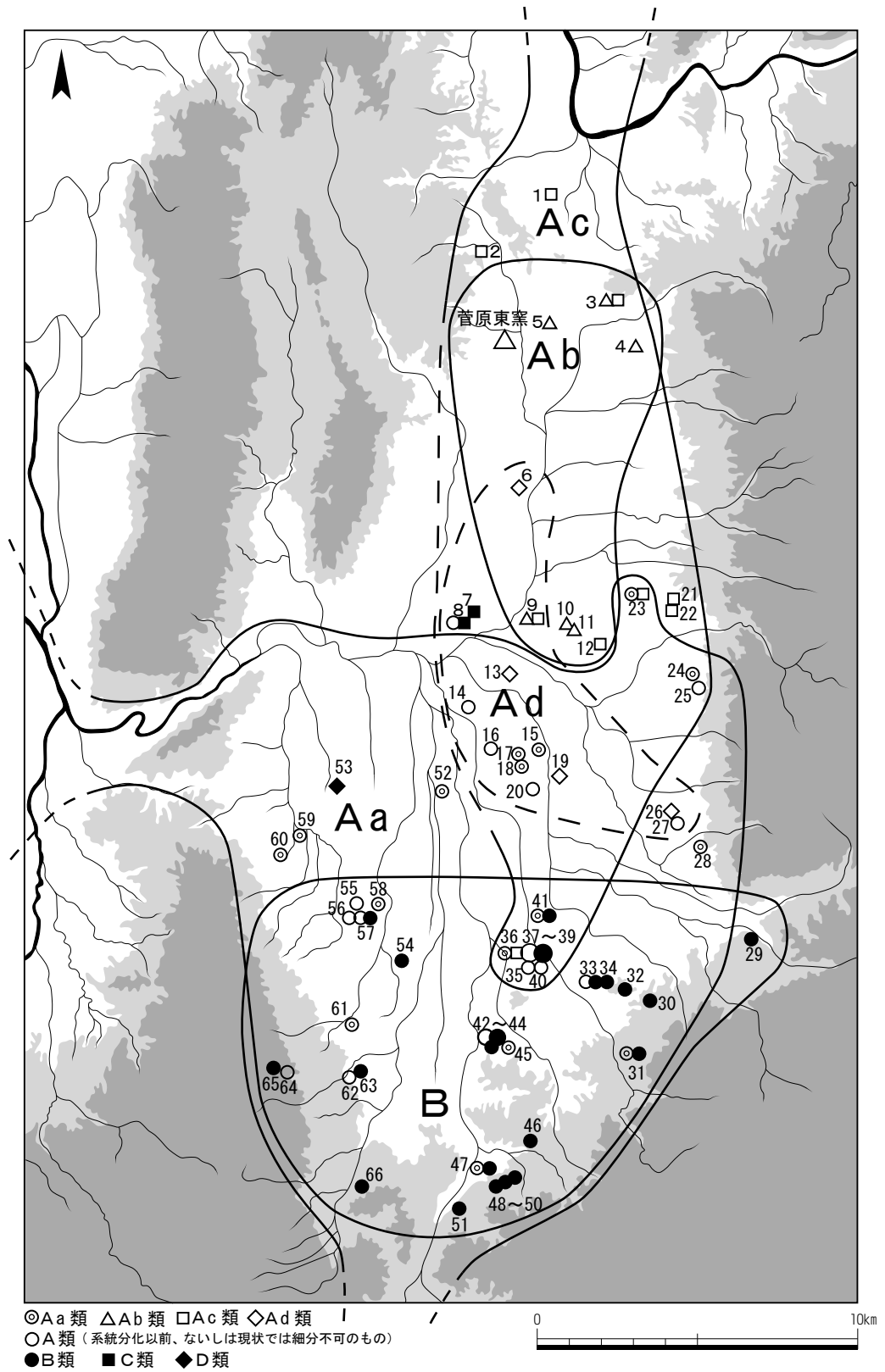


Fig. 26 奈良盆地における後期円筒埴輪の系統別分布状況

布・展開状況を詳しくみてきた。

その結果、意外にも古墳群全体あるいは個別古墳においても、特定の系統が限定的に受容されている状況を見出すことは困難で、むしろ複数の系統の製品を必要に応じて相互補完的に受給していた様子が浮き彫りになった。無論、現状で明確になっている生産地は奈良市菅原東窯のみであり、また胎土の科学分析も十分実施されていない状況のもとでは、推測の域を出ない部分もあるが、以上のような状況証拠の積み重ねからは、後期の奈良盆地では既に個別消費単位ごと、あるいは古墳群単位で埴輪生産体制を構えるような状況を脱しており、菅原東窯のような拠点的生产地が計画的に配置されて盆地内の消費地に埴輪を安定供給するような体制に移行しているものと推測される。

それを象徴するのが、盆地南部に集中的に築かれたいわゆる古式群集墳である。前節では、埴輪の系統関係に即して、古式群集墳ないしはそれに準ずる小規模墳からなる墓域での埴輪の受容状況を確認したが、とりあげたいずれの事例においても、古墳群としての自立的・主体的な生産状況を見出すことはできず、外部に製品供給を依存していた状況が明らかとなった。

ただし、奈良盆地南部のA類の生産地が一カ所であったかという点、必ずしもそうでなさそうである。四条古墳群や新沢千塚古墳群のA類において主体となる胎土は、鮮明な橙色ないしは乳白色の素地で、やや大粒の石英・長石に加えて褐色くさり礫を一定量含む。これに対して、前述のように池田古墳群のA類では、素地が白～灰白色基調で、風化白色礫や褐色くさり礫に加えて、微量ながら金雲母を含む胎土が主流となる。四条古墳群で主体となるA類の胎土は、高所寺池古墳群のA類、および桜井市纏向石塚東1号墳の資料と類似していることから、橿原市東部から桜井市にかけてのエリアを主な供給範囲とする拠点的生产地の存在を推測することができよう。胎土の違いが直ちに生産地の差に対応するとは限らないが、池田古墳群のA類で主体となる製品は、それとは別の拠点的生产地から供給されたものである可能性を見込むことができる。

ただしその場合でも、四条古墳群の一部や橿原市内膳4号墳におけるAa類においても、池田古墳群で主体となると白～灰白色基調の胎土が使用されており、逆に池田古墳群でも少量ながら橙色基調の胎土が確認できることから、両者は排他的な関係にあるのではなく、双方で盆地南部の製品供給を補完し合うような関係にあったものと推測される。白～灰白色基調の胎土を用いる池田9号墳、内膳4号墳では、ともに突帯Ⅱ群の無調整突帯（断続ナデ技法B）を含む点でも共通しており、同胎土を用いる生産地は橿原市西部から大和高田市にかけてのエリアを主たる供給範囲としていた可能性が考えられる。

さらに西方の香芝市・葛城市エリアでは、狐井城山古墳（本書付論Ⅱ）や北花内大塚古墳などの王陵クラスの前方後円墳が存在しており、それらの消費を賄うための大規模生産地の存在が見込まれる。高橋克壽が指摘したように、香芝市下田東1号墳と田原本町笹鉾山2号墳の馬形埴輪と馬曳のセットは同工品レベルの共通性を備えており（高橋2007、2012）、盆地西南部から中央部を含むような広範囲の流通圏の存在が見込まれる。このように、盆地南部のA類については、技法や形態上からは明確に細分できないものの、生産地としてはいくつかの単位に分かれる蓋然性が高い。

これに対して、B類（大和南部型）については、古墳や小地域を超えて技法・形態上の特徴が一致しており、さほど大規模ではない工人集団によって集約的に生産されたものと推測される。ただし、以前に指摘したように、ヘラ記号は紀伊のように波形一種ではなく（廣瀬2011）、少なくとも9種類以上のバリ

ーションが認められる。やはりB類は奈良盆地南部が発祥地であり、前述したようにこの地に定着した渡来系の土器製作集団の関与のもとに創出され、この地を拠点として紀伊や野洲川流域などへ伝播したものと考える。段数の多いものが紀伊で目立つことを根拠に紀伊を中心地とみる理解もあるが（高橋2012、河内2019）、この点に関する批判は後述する。

またその生産体制も、かつて「紀伊型」の展開で想定されたような工人集団が消費地に移動して埴輪を製作する「移動型」のモデル（河内1988）ではなく、製品が流通していたものとする。A類との共伴例が頻繁に生じていることが明らかになった以上、B類のみを工人移動で説明することは困難といわざるを得ない。B類の生産と流通を考えるには、内藤元太による分布状況の整理が参考になろう。すなわち内藤は、盆地南部でもより南方のエリアでB類単独での出土事例が多いことから、同地がB類の分布の中心でかつ誕生地とみた（内藤2018）。的確な指摘であり、生産地も同じく盆地南端に位置する可能性が高いが、製品流通を仮定した場合、他系統との共伴事例も含めて、絶対量からの視点も重要となろう。やや北寄りの新沢千塚古墳群や四条古墳群では、A類と共伴するものの、B類の占める割合は高い。一方で、分布の北限に位置する池田古墳群では、8号墳から現状1個体が出土しているのみであり、三倉堂古墳群でも墓域の一角に5個体が限定的に搬入されているに過ぎない。また分布の東限にあたる赤尾崩谷古墳群でも、5基中の1基のみに限定的にB類が搬入されているだけでなく、その樹立本数もかなり制限を受けている。同様に西限付近に位置する石光山20号墳では、B類の分布域中央に位置する新沢千塚古墳群と比べて埴輪の樹立間隔が広がっており、やはり供給量に一定の制約が生じていた様子がうかがえる。このように地理的勾配にそって出土量が減少する状況は、B類が分布域の中央で生産拠点を構え、一定期間、生産を継続し、需要に応じて製品供給を行っていた状況を裏付けている。

他方、盆地北・中央部では、菅原東窯が広く供給圏を形成する。ただし、現状でも中央部における確実な消費地は大和郡山市星塚1・2号墳や水晶塚古墳のみであり、それらが菅原東窯の供給範囲の南端となる。直線距離で約10kmを測るが、その付近がちょうど秋篠川が注ぎこむ佐保川の末端にあたる。従前から指摘があるように（鐘方1992）、菅原東窯の開窯は、秋篠川の水運を利用した盆地中央部への供給を念頭に置く計画的な設置であったことが推測される。

菅原東窯の近郊では、奈良市平城京左京三条一坊二坪（平城第515次調査）検出の古墳周溝SD10416出土埴輪において新たに同ハケ関係が認められ、同窯が遠隔地のみならず近郊の奈良市域にも製品供給を行っていた様子が明らかになりつつある（本書付論I）。古墳周溝SD10416は、中期の埴輪窯である平城宮東院下層窯の目と鼻の先にある。そこに菅原東窯産の埴輪が供給されている事実は、まさに古墳時代後期を境にして佐紀東群の巨大古墳周辺から菅原東窯へと埴輪の生産拠点が移転した様子を裏付ける。

ただし平城山周辺では、前述のように白色基調の特徴的な胎土の使用から、菅原東窯のほかにもAc類に対応する生産地が存在する可能性がある。Ac類は、平城山周辺の消費地以外にも、中央部の水晶塚古墳や天理市岩室池古墳、東部の別所古墳群周辺にまで分布圏を広げ、局所的には南部の四条古墳群にまで製品供給をおこなっているとみられる。消費地のひとつである奈良少年院古墳が菅原と対比される秋篠の地に所在する点は、未知の窯の所在を推測する上で興味深い。

このほか盆地中央・東部では、南部から連なるAa類の分布圏が広がる。田原本町笹鉾山1号墳からはⅡ群無調整突帯を含むAa類の大型品が出土しているが、隣接する2号墳出土の馬形埴輪と馬曳は前

Tab. 2 奈良盆地の後期古墳における円筒埴輪による階層表象（廣瀬2019表2に加筆）

古墳名	墳形	規模(m)	段数	系統	階層
(今城塚古墳)	前方後円墳	190	8		王 陵
西乗鞍古墳	前方後円墳	118	7	A類	
小墓古墳	前方後円墳	85	7+・6	Aa類	A
御墓山古墳	前方後円墳	74	6+・(5)	Ab類・Ac類	前方後円墳 墳丘長65m以上
黒田大塚古墳	前方後円墳	70	6+		7・6段
市尾墓山古墳	前方後円墳	66	7・6	Aa類・B類	
別所罐子塚古墳	前方後円墳	57	6	Ac類	
羽子田1号墳	前方後円墳	?	6+		B
笹鉾山1号墳	前方後円墳	50+	6	Aa類	前方後円墳 墳丘長50m以上65m未満
岩室池古墳	前方後円墳	55?	6・5	Ac類	6・5段
袋塚古墳	前方後円墳	55	5	Ac類	
珠城山3号墳	前方後円墳	47.5	5		
佐々木塚古墳	前方後円墳	45	5	Ad類	
三宅瓢箪山古墳	前方後円墳	40	5	A類	
水晶塚古墳	帆立貝形	50	5・4	Ab類・Ac類	
石見遺跡	帆立貝形	35+	5・4	Aa類	C
星塚1号墳	帆立貝形	37	5?	Ab類	前方後円墳・帆立貝形古墳
星塚2号墳	帆立貝形	36	5?	Ab類	墳丘長20m以上50m以下
まるこ山古墳	帆立貝形	30+	5?	Aa類	5・4段
荒巻古墳	帆立貝形	30	5・(7)		
音乗谷古墳	帆立貝形	22	5	Ac類	
寺口忍海D27号墳	帆立貝形	20	5	A類	
石光山17号墳	帆立貝形	25	4	A類	
四条9号墳	円	26	4?	A類・B類	
笹鉾山2号墳	円	22	4	Aa類	
小坂里中古墳	円	22	4・3	Ad類	
勝山東古墳	方?	21+	4?	Ad類	
下田東1号墳	方	21	4	Aa類	
内膳4号墳	方	20+	4	Aa類・B類	
観覚寺鳥ヶ峰1号墳	円	19	4	B類	
四条6号墳	円	18	4・(5)	Aa類・Ac類	D
新沢千塚166号墳	円	18	4・3	A類・B類	円(方)墳 直径25m前後以下
纏向石塚東古墳	円	16.5	4	A類	4・3段
新沢千塚175号墳	円	16.5	4・3	B類	
五合瀬古墳	円	15	4		
池田5号墳	円	—	4	A類	
池田8号墳	方	—	4・3	A類・B類	
石光山20号墳	円	14	4	B類	
谷田深谷1号墳	円	15	3	B類	
四条8号墳	円	13.5	3	A類・B類	
赤尾崩谷2号墳	円	12	3	B類	
三倉堂遺跡	—	—	3	B類	

A類は現状、
細分不可のもの

述のように香芝市下田東1号墳と酷似しており、南部から直接の製品供給によってAa類の分布圏が形成された可能性を示唆する。また天理市御墓山古墳では、北部の系統のAc類と南部の系統のAa類が共存しており、両者の流通が盆地中央部で重なり合う状況がみてとれる。

一方で、中央部では、前述のように現状では点的ではあるがAd類の分布が明らかとなりつつあり、中央部域独自の生産地とその供給圏の存在が推測できるようになってきた。さらに、大和郡山市額田部

狐塚古墳や南方古墳における尾張系埴輪の存在、田原本町羽子田6号墳の輪台技法（淡輪技法）を用いた埴輪、三宅町三宅瓢箪山古墳における現状では系統不明のA類の存在は、さらに小規模な生産地が中央部に存在する可能性を示唆している。

なお、D類とした烏土塚古墳や牧野古墳に代表される一群の埴輪については、典型的なV群円筒埴輪ではないという以上に特徴が見出せず、また分布も散在する状況であるため、実際のところ系統としてのまとまりを有するかどうか定かではない。主要な系統の埴輪生産が終焉する時期の所産であることから、現状では詳しい言及を控えることにする。

（2） 墳丘にみる階層秩序と円筒埴輪の段構成

以上のように、後期の奈良盆地では、各所に拠点的な生産地を設置した上で、消費地の需要に応じて埴輪を多元的に供給する体制が確立する。そうした長距離輸送を含む一元的な生産・流通体制の出現については、菅原東窯の発見直後から指摘されてきたことではあるが、本研究ではさらに系統識別やそれにもとづく製品流通の様相を掘り下げた結果、複数の拠点のあるいは局所的な生産地の存在が推測できるようになり、盆地内の生産がより多元的に展開していた様子が鮮明になってきた。従来、こうした後期の生産体制の出現をめぐるのは、「断続ナデ技法」によるV群円筒埴輪や石見型埴輪に象徴される通有の「畿内型埴輪」に評価が集中し、そこに「政権の内部組織に属する造墓集団＝土師氏」との関連が見いだされる一方で、それ以外の埴輪については土師氏による再編成の対象外にあった製作集団、すなわち「豪族私有の生産組織」の手によるものとの見方が提示されてきた（鐘方1992、2003）。あるいは、「恒常的に埴輪を供給する集団の固定化、集約化」と表裏で、「埴輪生産集団」の「首長から（の）相対的な自立」を読みとる見解もあり（高橋1994）、とりわけ通有のV群円筒埴輪とは製作技術を違えるB類（大和南部型）については、紀氏影響下の渡来系集団の関与を推定し、「被葬者の出自や系譜を反映した」例外的な供給事例としての評価が付与されてきた（高橋2012）。

しかしながら、そうした一部のV群円筒埴輪（本書分類のAa、Ab類）のみに限定して王権との関係を論じたり、B類に関して過度な自立的展開を論じる見解は、必ずしも当該期の奈良盆地の埴輪生産の本質をいい当てていないと考える。そもそもB類は、消費地でA類と共伴する事例が多く、B類の展開をそれ単独で評価するのは適切ではない。B類の主たる供給地である古式群集墳では、埴輪の主体的生産の形跡が見いだせず、製品供給を外部に依存していたことは前述した通りである。

そこで視点を変えて、墳丘による階層秩序と円筒埴輪の段構成の關係に着目してみよう。Tab. 2は、奈良盆地の後期古墳において、墳丘の形状・規模と円筒埴輪の段構成の双方が判明する事例を整理したものである。一見してわかるように、後期の奈良盆地では、5段以上の円筒埴輪は帆立貝形を含む前方後円墳でなければ認められておらず、また前方後円墳であれば墳丘長に応じて基本となる段構成が階梯的に序列化されている。全体では、墳形・規模と一体で5ないし6段階程度のきめ細かな序列化の存在を見出すことができるのである（廣瀬2019）。従来から指摘があるように、B類は群集墳中の小型墳への供給事例が多く、大部分が3・4段の小型品であり、またAc類も5段となる事例が多いが、それはあくまでも傾向に過ぎない。市尾墓山古墳では、全形は不明ながら共伴するAa類に対応してB類が大型品として製作されており、また60m級の前方後円墳である別所鎌子塚古墳や岩室池古墳ではAc類が5条6

段で製作されている点は、系統差を超えて一律の基準で円筒埴輪の段構成が序列化されていたことを裏付ける事実として重要である。

(3) 後期における生産体制とその背景

以上のような墳丘の形状・規模と一体の円筒埴輪の段構成による階層表象の存在を踏まえると、一見すると分散化のようにみえる後期の奈良盆地における埴輪生産体制は、盆地内の需要を満たすための生産地の拠点化とその計画的配置の結果にはかならず、決して埴輪生産集団の自立化を意味するものではなかったことが理解できる。盆地各所における拠点的生産地の設置とその運営を通じて、一律に階層的序列化が進行することを踏まえると、むしろ王権はそこに積極的に関与していたものと考えざるを得ない。

翻ってそうした埴輪の生産体制の変化の背景となる古墳の築造動態に目を転じると、古墳時代後期の開始は、佐紀古墳群や馬見古墳群のような特定の巨大な墓域に限定して階層構成型古墳群を造営する中期的な古墳秩序の解体と表裏の関係にある。それと同時に本来的な地縁の結合にもとづいて墓域が個々の本貫地に分散回帰し、さらには古式群集墳の造営が一斉に開始されることが指摘できる。こうした造墓原理の変化は、一見、規制からの解放のようにも映るが、実際には小地域単位での古墳秩序の形成、換言すれば王権によるより緻密な地域、集団支配の浸透を意味していたものと考えられる。埴輪生産拠点が盆地内の各所に計画的に配置されていく動きもこうした王権による新たな政治秩序の形成と不可分であったのである。

後期の埴輪生産体制にみる政治的評価に関しては、本書でいうA類、すなわちV群円筒埴輪の展開を通じてこれまでも論じられてきており、また、そこには絶えず王権内の造墓や葬送を取り仕切る土師氏の姿が投影されてきた。かかる立場からは、B類のようなV群の製作技術をもたないローカル色の強い埴輪にまで王権の関与を見出す理解には違和感があるのも確かである。実際にその生産集団自体は、鐘方や高橋がいうように、王権直轄ではなく奈良盆地南部の豪族層が私有する組織であった蓋然性が高い。しかしながら、そうした豪族層も王権の構成員として古墳の政治的秩序に組み込まれた存在であったことも確かである。そして、鐘方も指摘するようにA・B類の共伴事例の存在は、B類の生産集団もまた王権直属の造墓組織である「土師氏」と連携して埴輪生産を分担・補完する立場にあったことを如実に示している。

埴輪生産にみる部民制内部の構造的理解についても、これまでは文献史学による「土師氏」研究のイメージが過度に意識されるあまり、「土師連－土師部」のような直接的な組織編成や技術的指導のみが注目されてきた。そこから外れるローカルな埴輪を直ちに豪族層の私的關係に置き換える図式は、V群の埴輪を公的に評価し過ぎた反動ともいえる。むしろB類の展開からは、必ずしも直接的な組織編成や技術的指導をとまなわない王権への労働奉仕のあり方が存在した可能性が示唆される。さらには、奈良盆地におけるB類の展開が、工人の巡回ではなく製品供給を基本とするという本書の検討成果を重視するならば、それは厳密には労働奉仕よりも貢納という側面から評価されるべきかもしれない。いずれにしても、B類の展開過程に関する評価は、従来の埴輪生産における部民制の理解を相対化し、新たな視座を導き出す上で重要な鍵を握る。この点については、次章以降であらためて触れることにする。